

心理臨床の 広場

特集

① 人と繋がる

② 心理の専門家の繋がり

対談

道下美里×田中真理

WORLD MAP

ロンドンでの精神分析体験

28

Vol.15 No.1 Apr. 2022



一般社団法人
日本心理臨床学会



田中 今日はやっと本物の道下さんにお会いできて大変嬉しく思っています。

道下 いえいえ、そんなふうに言っていただけで（笑）。

田中 実はここに来る前、昨年の東京パラリンピックの道下さんのレースを改めて拝見して、それでまたゴールの瞬間にうるうる涙してからこちらに向かったんです（笑）。

道下 ありがとうございます。

田中 先ほど簡単に自己紹介させていただきましたが、私の専門は心理学です。声が子どもみたいとよく言われるんですけど、年齢は今年還暦

を迎えて六〇歳になります。

道下 あ、そうなんです。声では全然わからないですね。

田中 私が道下さんを最初に拝見したのはテレビだったんですけど、マラソンの選手というのを知った前「えっ、なに？」と思ってまして（笑）。今日はその本物の笑顔の方にお会いできるということで、とても楽しみにしてきました。まずは東京パラリンピックのマラソンでの金メダル、おめでとうございます。

道下 ありがとうございます。

田中 「おめでとうございます」と同時に「あ

りがありがとうございます」と言いたいです。勇気と挑戦することの大切さ、意志を持つこと、そして公平であることを道下さんの走る姿から教えられて…。

道下 公平であること？ それは初めて言われました。

田中 私は大学でインクルージョン支援推進室の室長をしているんですが、心身機能の多様性とか性の多様性とか脳の多様性とか、そういう観点から多様ないろんな学生や教職員の支援をする仕事も兼務しているん



ですね。そういう中では「公平さ」という視点がすごく重要で、チャレンジすることの公平さ、機会の公正さが十分に保障されていないことをいつも腹立たしく思っていたところに、道下さんの走られている姿を見て、やっぱり挑戦することの尊厳とかそこに向かう勇気とか、そして、繰り返しになります。公平さというのをとても教えられたので、まずはそのお礼をお伝えしたいと思いました。

道下 ああ、なるほど。ブラインド

巻頭対談

Misto Michishita

Mari Tanaka

道下美里×田中真理

マラソンは、二〇一六年のリオ大会から女子も正式種目になりました。いろんな人にチャンスが与えられるという意味では、パラリンピックはすごく公平になりつつありますね。

田中 国際パラリンピック委員会が掲げる「パラリンピックの4つの価値（勇気／強い意志／インスピレーション／公平）」の中にもやっぱり「公平さ」が入っていて、まさにそれを走る姿によって具体的な形として示されたというふうに感じました。

支え、支えられる関係

田中 今回、道下さんのご著書『いっしょに走ろう』（芸術新聞社）をじっくりと読ませていただいて、まさにこのタイトルが素敵だなと思ったのですが、この言葉は誰が誰に投げかけているものなんですか？

道下 そうですね。まず単純に、私が一人で走れないので、伴走をしてくださる方に対して「いっしょに走ろう」という意味もありますし、私たちのように身体に障害のある人だったり、社会で生きづらさを感じている人というのは、一人ではなかなかできないことがあったりするので、そういった意味で、人生を共に歩ん



芸術新聞社、2015年

でくれる、そういう人たちがいっしょに走ってくれることで乗り越えられることがいっぱいあるという思いを込めた言葉ですね。

田中 なるほど。マラソンだけではなくて人生をいっしょに：と、そういう広がりがあるタイトルなんです。この広がり、多様性を包摂する社会の拡がりと同じくするように思いました。先ほど出た伴走者（ガイドランナー）の方との関係性というのは、どのようにして築いていくものなんでしょうか？

道下 まず私は、世の中には視覚障害者と接したことがある人ってそんなにいるわけではない、というふうな考えをしています。なので、たぶん誰もが「どう接したらいいかわからない」というところから入るのかなと。私自身も目が不自由になる前は、障害がある方に対してそういうふうな思っていました。意識して距離を取

っていたわけでもないんですが、普段接する機会もないし、なんとなく壁というかバリアみたいなものを持っていたのかなというところがありました。

だから私自身は、ガイドランナーさんと初めてロープを持って接するときには、どういうふうに接してもらったら自分は嬉しいかをこちらから伝えることを意識しています。例えば、段差一つにしても上方向の段差なのか下方向の段差なのか、段差という言葉だけではわからなかったりすることを、より具体的に言ってもらいたいと伝えていきます。

あと、伴走者の方にとって、私と接することが義務になったりすると負担になると考え、なるべく二人だけだったり三人だったり、常に代わりの伴走者がいる体制にしておいて「いつでも断って大丈夫ですよ」という状態を作ること、相手の人が接しやすくなるというか重荷に感じなくなる、そういうことを常に心がけていたりします。

それから、伴走者の方が私と接すること、何か自分の目標を叶えるとか、何か自分のやりがいに繋がればいいなと思っっていますね。伴走者の方にとってプラスになることって



何だろうというのを普段の会話やコミュニケーションの中で聞きながら、自分が相手に対して何かできることはないかを意識するようにしています。そうすることで、相手の意欲が高まるじゃないですか、いっしょにやっていきたいとか、そういうふうな思ってもらえるとコミュニケーションが取りやすくなってきたりすることはありますね。

田中 今までのインタビューの中では「同じ鼓動を刻む感覚なんだ」という言葉を使っていたりしゃつたりしましたね。

道下 あくまでも伴走者ってサポートする側ではあるのですが、「支えている」という感じだと、私が「支えてもらっている」という関係にな



ってしまいうんですね。それだと、やっぱりだんだん行き詰まるというか、競技という部分でさまざまなことを追求していく中で、そういう関係性だと徐々にやりづらさが出てくるんですよ。私自身は誰よりも速く走るために腕をしっかり振って推進力を生まなければならぬ。私が主体的に走らないといけないんですが、そのとき、持っているロープを邪魔に感じていたら、結局いいパフォーマンスに繋がらないですね。

もし、私が「してもらっている」という感覚をずっと持っていると、たぶんそこまでの関係、そこまでのパフォーマンスしか出せないんです。なので、自分がこうやりたいんだというのを伝えられる関係にならないとダメで、それって普通の人間関係でも、尊敬できる人だったり、お互いに感謝し合える関係だったり、何かそういう関係になれば、たぶん共にいっしょに歩んでいけるんですね。

だから、そういう関係になるために何が必要かというところを追求していった結果、相手のやりがいだったり夢だったり繋がる何かがあると、いっしょに歩いてくれるというか、いっしょに走ってくれるという



か、そういう状況が作れるのかなと感じています。

田中 伴走者の方も皆さん同じようにおっしゃっていますよね。つまり、自分たちは支えているわけではないと、支えて、支えられて、という関係なんだと。

道下 私と長くいっしょに走ってくださっている方というのは、いっしょに走っている中で、今まで感じなかった価値観に気づくことができたとか、何か自分の中で見えなかったものが見えてきたとか、出会うことによって学びがあるから、だからいっしょにやりたいと思うんだと言ってくれる方が多いというふうには思っていますね。

人は「映し鏡」

田中 道下さんのこれまでのお話の中でも「本音を言う」「本音をストリートにぶつける」というようなことが繰り返し出てきて、やっぱりご自身の本気度が桁違いだから、もう本音でぶつかり合うしかないのかなって思いますけど（笑）。ただ、やっぱり本音というのは表現しにくい部分もあると思うんですね。相手に遠慮したりとか。

道下 本音をぶつけるってすごく難しいですし、私も伴走者の方に「こうしてほしい」とか「自分はこう思っている」ということを伝えるのはとても難しいですけども、ただ、伝え方ってあるじゃないですか。

まず最初に、やってもらってうれしかったこととか、感謝の気持ちを伝えた後に、「もつとこうすれば、さらに速く走れたかも」とか、やっぱり言い方や順番でだいぶ変わってくると思います。なので、批判的に伝えるのではなくて提案型で伝えるとか、そういったことはすごく意識しています。最終的には、私たちは競技で結果を出すというところが目標なので、何かに妥協していたら望



む結果にたどり着けないと思うんですね。

やっぱりお互いが、細かいところも妥協せずに取り組んだ結果が金メダルなのかなと思うので、そのためには言いにくいことも言うし、毎回練習の後にミーティングを必ずやるんですけれども、言いにくいことって溜め込んで言うとか大変なことになっちゃうんですよ（笑）。なので、気づいた時点で、もう傷にならないうちにさらりと言うみたいなきっかけがけていますね。

田中 先ほど「普通の人間関係でも

…」という話があったのですが、この本の中に親友と二人で京都旅行をしたときのエピソードが出てきますよね。私が印象に残っているのは、道下さんが弱い部分を隠していてお互いにわだかまりが積もっていったときに、その友達が「適当にやり過ぎそうとせず、本音で私に思いをぶつけてくれた」というところなんです。普段の私たちは、もし思うところがあっても日常の中で適当にやり過ぎとして、あまり本音を表現しないことが多い中、やっぱりそれをきちんとぶつけ合ったという、本気で

つながる関係にはそういうことが大切なんだなあと思っています。それが伴走者の方とも、結局は人と人との関係ですので、共通しているんだと思います。

道下 私は、人は映し鏡だと思っていて、最終的には自分が接しているのと同じように相手も接してくるんですよ。なので、自分が本音を出さなければ、向こうも本音を出してくれないし。

田中 なるほど。いや、私自身の関係性の中で本音をぶつけている相手が、私にはどれだけのだろうかと今ちょっと振り返って思いました。

道下 いや、でも、すごく難しいですよ。相手との距離感だったり、それまでの関係性によって、同じ言葉を使っても全然伝わらなかつたり、伝え方次第でどう伝わるかというのがありますし。たぶん日常のコミュニケーションの中では、そういうことをほとんど知らない間に感じてやっているのじゃないかな。

共通の言葉を探る

道下 例えばですが、視覚障害者への声かけ一つにしても、人によってはたくさんしゃべらないといけない

とお話される方がいると思うんですけど、でも私は、特に競技に関しては伴走者さんも楽をしてほしいと思ってるんですね。常に二人や三人でゴールを目指すので、お互いに楽をしてゴールにたどり着けたほうが絶対いいです。なので、いっぱいしゃべればそれだけエネルギーを使うので、短い言葉で具体的に、曖昧な表現を使わないということをお願いしています。あと、共通用語を使って反応速度を速くするというようなことをしていますね。

紛らわしい言葉で、例えば、「上げる」という言葉を単純に使ったとしたら、スピードを上げるのか、足を上げるのか、わからないじゃないですか。そういう曖昧な表現を使っていると、途中で意思の疎通がうまくいかなかったり、会話が通じなくなるんですね。お互いに思ったことが違い始めると、それがだんだんだんだん溝になっていくので。そういうふうにならないように言葉選びには気をつけています。

田中 私は心理臨床の場で、発達障害の子どもたちと関わることが多いのですが、同じ言葉を使っている受け止めるイメージが全然違うときがあるんです。だから、自分と子ども

もたちとのあいだで、本当に共通した意味としてその言葉を使っているのだろうかということは、常に点検しながらやりとりをしています。

例えば、その子が「友達がいっぱいできました」と言ってきたときに、友達という言葉で多くの人がイメージするのは、深い話を本音で言い合ったり、いろんな行動をその人と共にするみたいなことを想像しますが、その子の話をよく聞いていくと、「朝『おはよう』と言ったら『おはよう』と返してくれるんです！まさに友達って感じなんです！」と言

うんですね。「友達」ということの意味合いが、その子と私とはそれぞれ異なっている。

だから、やっぱり言葉のもつ意味をよく吟味して使っていくことが大切で、その言葉によって相互の意味世界を共有していくわけですから。もつと言えば、言葉の意味だけでなく体験を聞きながら、体験もていねいに共有していかないと、もうどんなふうにいきます。道下さんのお話を聞いて、「ああ、そこは同じなんだなあ」と感銘を受けました。



ユーモアや笑いの大切さ

田中 東京大会で二人目の伴走者の志田淳さんの白い歯がずっと見えているんですね。志田さんが笑いなから、何か一生懸命、道下さんに話しかけていらつしゃって。解説者の増田明美さんも「あれは何を話しているんですかね？ きつと何か笑わせているんじゃないか、リラックサさせているんじゃないか」というようなことをおっしゃって…。あれはどういう会話をされていたんですか？

道下 周りの状況を説明してあげていました。「報道の人がいっぱいいるよ」とか、「○○コーチがこっちを向いている」とか（笑）。いろんな状況を私に教えてくれていて。

田中 ああ、そういう話をされていたんですね。実は私はユーモアの研究もちょっとしてまして、やっぱりユーモアや笑って重要だなとすごく思っているんですね。そこで、ユーモアという視点から、競技に臨む前のお気持ちとかをお聞きできたらと思っただけですが…。

道下 ああ、そうですね。実は銀メダルだったリオ大会のときは、笑っ



てはいたのですが、何かちよつときこちない笑いだつたのかなと思つていて。やっぱり心の底から笑える準備をしなければいけないと思ひました。それで、東京大会に至るまでに、過去のオリンピックだったりパラリンピックで勝利した人のインタビューを見たり聞いたりしたんですね。そうしたら、やっぱり最後に金メダルを獲得する選手というのは、本当にすべてのことに対して感謝をしている人たちが多くて。本当に心から、すべてを味方につけられる人たち、そうやってゴールに立つて金メダルを獲っているんだなということとをすごく感じました。なので、いかに楽しく、いかに幸せだと思えるようなゴールにたどり着けるかとい

うことを、それからすごく考えるようになりまして。

マラソンって、けっこう辛くてきつい、苦しい競技じゃないですか。だから、日常の練習でも、やっぱり何かしら笑いがあつたほうが楽しいというのがありますね。そうそう、伴走者の方も、そういう感じの人が多いんですよ（笑）。きついことをいかに楽しんで乗り越えていけるかというのを追求している人が、たぶんマラソンランナーとして継続していける人なのかなというのがあつて。

めんとつちやつたけど、みつちゃん食べる？」と。そういうことがあるんだって驚きました（笑）。

道下 はい、そういうことが起きたりもします（笑）。昨年の東京大会では、志田さんが三五キロ手前ぐらいで道を間違えたんですね。

田中 ええっ、それは…。そんなときはイラつとしたりしないんですか？

道下 私としてはそれも想定内で、志田さんは毎回何かやらかすんですよ（笑）。「左」と言つて実は「右」だつたり。今回も何か挟んでくるかなと思つたら、道を間違えてくれたので、ああ、いつもどおりだなと思つて笑いながら走つていました（笑）。

田中 レースの映像では、道を間違えたその場面ときは男子マラソンの方が映つていたのでそんなことが起きていることはわからず、そのあとに女子マラソンに画面が変わつて、アナウンサーの方が「先ほど道下選手がコースを間違えたようですね」と言つて。「ええーっ、そんなことがあるんだ！」と思ひながら見てたんですけど。

道下 私が道を間違えるわけがないんですよ。私は見えないんですか

ら（笑）。

でも、チームを結成するのにお笑ひ担当つて決めているところはありますね。三人いて、私ともう一人は正統派なんですよ。志田さんはそうではないので（笑）。なので、お笑ひ担当ということで志田さんには講演会とかイベントのときは「ちゃんと笑を取つてね」とお願いしています。役割分擔つてやっぱり大切で、たとえデコボコチームだつたとしても、それぞれいいところがあるし、足りないところはお互いに補ひ合うのが理想ですね。

いっしょに「無理」はしない

田中 もう少し伴走者について伺いたいんですが、道下さんはピッチが速いですし、伴走者の方とは身長差がかなりあつて、歩幅をいっしょに合わせることはできないですよ。動きやテンポの同期というか、そのあたりはどうされているんですか？

道下 それは伴走者の方が、うまく私の腕振りの邪魔にならない位置でリズムを刻んでいたりしてくれていますね。本当は同じ歩幅で同じようにシンクロするのが理想かもしれないんですけど、実はそういうことを

やろうとして過去に何度も失敗して
いるんですね。

私のピッチに合わせるということ
は、かなりスピードを下げないとい
けないとか、やっぱり伴走者の方の
体の負担が大きくなるんです。それ
で、今はもうその部分は合わせる必
要はないというふうに最終的にたど
り着いていますね。

ただ、やっぱり推進力を生むため
に腕の振りは必要だし、その邪魔に
ならない場所でロープをたるませる
ような形でやってほしいと伝えたと
ころ、身長差がある方は少しだけ腰
を落としたり、ちょっと屈んでいる
ような感じで走っているかもしれない
ですね。走力に余裕があるので、
変に腕を合わせるよりはその方が楽
なので、そういうふうになっている
みたいです。なので、伴走者が歩み寄
ってくれているところはありますね。
田中 東京大会の映像を見ていると、
ロシアの選手などは歩幅とか全部合
わせている感じでしたが、それぞれ
の選手と伴走者とでやり方が違うん
だなあと改めて拝見していました。
でも、今のお話も人生と同じで、人
に無理やり合わせていくとやっぱり
無理が出るのかなあと。自分流でそ
れぞれがいて、それでいてお互いに

合っている感じというか。そうじゃ
ないと長く続かないですね。

道下 うんうん、そうですね。確か
にそうです。

田中 ゴールに向かっていっしょに
歩んでいくというのはやっぱり難し
いことだし、何か人生といっしょだ
なあと改めて感じました。

社会を変えていく力

田中 東京パラリンピックの開催前
に行われたインタビューで、私がす
ごく印象に残っている道下さんの言
葉があるんですけど、「今後の目標
は？」と聞かれたときに、当然「金
メダルです」と答えると周りの人も
たぶんそう思っていたと思うんです

けど…。

道下 あれ？ 何て答えただろう

(笑)

田中 道下さんは「いろいろな人と
出会いたい。旅行が好きなのでいろ
いろなところに行きたいです」と。

道下 ああ、そうですね！

田中 「そのために金メダル目指し
ます」って言われたんですよ。

道下 うんうん、そうですね。はい。

田中 金メダルを獲ること、そのこ
と自体が目的というよりも、その先
とか、何か人生のもっと長いスパン
というのか、時間軸の横とか縦の繋
がりをもすごくイメージできる言葉に
感じました。あのときはどんな思い
でおっしゃっていたのかなと。

道下 私は目が不自由になって、走

り始めて、ある時期から、世の中が
障害のある人にとって生きづらい社
会だなというのを感じたんですね。

一方で、私の友達は、私が障害のある
人に見えないと言っています。それは
私のすごくいいところだから、障
害がある人となない人の架け橋になる
ような、そういうことをしていきたい
らしいね、と言ってくれて…。ちょ
うどその頃はたぶん社会に自分は必
要とされていないのではないかと
未来に対して希望も持てなかった時
期だったので、何かその友達の言葉
が私にとってのやる気スイッチにな
って。

それでやっぱり、何のために金メ
ダルを獲りたいかといったら、私が
金メダルを獲れば、いろんな人と出
会う機会をいただけるじゃないです
か。なので、金メダルを獲った先に
いろんな人たちと繋がって行って、
障害がある人への理解が深まればい
いなという…そのために今走ってい
ると思いますね。

田中 前に道下さんが「私は、共生
社会の実現にアプローチしている
チャンスをもたらしている」と言われ
ていた、まさにあの言葉ですね。

今、多様性やダイバーシティが言
われる中で、さまざまなニーズに応





えるためにデジタル化やICTの技術や人工知能の助けを借りるといような動きがありますよね。例えば今日、白杖はくじょうをお持ちですけれども、杖の先に方向や地形を読み取るナビゲーションアプリを埋め込むことによつて、そこから情報を得るといったような技術や、手話でコミュニケーションをする人には通訳者ではなくAIが手話通訳をするなどです。三〇年後、五〇年後になれば、伴走ロボットみたいなものが出て、そのロボットが全部ガイドしてくれる、ペイスメイクもしてくれる未来が来るかもしれない。そういうときには「やっぱり伴走者は人でなくてはない」とか、どのような思いやお考えがありますか？

道下 うーん、そうですね。私自身が障害者になってすごく感じるのには、人に頼ることがストレスに感じることもあるんですよ。一人で何かしたいと思うときに、ロボットがいて、それをうまく使っていければいいとは思いますが…。一人で走りたいときはロボットといつしよに走ればいいし、人と走りたいときは人と走ればいいし。だから、あんまりどちらがいいというのは言えないかなと思いますね。

田中 うんうん、なるほど。

道下 ただ、このコロナ禍になって、私のような視覚障害者に限らない話ですけど、外に出ていくということ、人が人の迷惑になるのではないかと思つて、家に閉じこもっている人が結

構いたりとか、そういう人たちとたまに電話で話をする、認知症のような症状が進んだりとか、少し前は体も元気だったのに、久しぶりに会ったら歩くのがおぼつかなくなつていたりとか、そういう姿を見ていてみると、本当に人と接する機会がないということはすごく怖いことなんだなということをとんでも感じるので…。

だから、ロボットがその代わりになればじゃないですけど、今みたいに人と接することが難しい状況のときに、何かしらの策を講じないと、特に高齢者や障害がある人の心が、ちよつと大変になつてきていると思ふので、何か希望が持てるようなものができたらいいなと思います。

田中 今、確実に社会はそういう方向に動いていっていると思います。肝心なのは、自分が好きなきに使えること。これは人がいい、これはロボットがいい、と自己決定して選べるのが重要ですよ。

多様性が社会的な変革を引き起こしていくチャンスを生み出すことつてまだまだいっぱいあると思うんです。今日は本当に楽しいお時間をありがとうございました。

道下 いえいえ、こちらこそありが

とうございました。

道下美里（みちした・みさと）

一九七七年生まれ、山口県下関市出身。中学二年生の時に右目を失明。二五歳のとき、左目に原因不明の難病を発症し、のちに「膠様滴状角膜ジストロフィー」と判明。

二〇〇三年盲学校に入学し、盲学校在籍中に陸上競技と出会う。最初はダイエツト目的で走り始め、二〇〇八年にフルマラソンに挑戦。その後も「あきらめない心」「挑戦する心」をモットーに、数々の大会に出場。二〇一六年、三井住友海上に入社。二〇一七年に女子視覚障がいマラソンの世界記録を樹立し、その後二度更新。二〇二一年東京パラリンピック・女子視覚障がいマラソンで金メダルを獲得。

田中真理（たなか・まり）

九州大学教授。博士（教育心理学）。一九七七年より静岡大学人文学部助教授、東北大学大学院教育学部准教授・教授を経て、二〇一六年より現職。インクルージョン支援推進室長として障害者支援を担っている。「大学における科学的根拠に基づく発達障害者への合理的配慮」「自己理解・他者理解を核として生涯発達における発達障害者の心理教育的支援」を中心テーマとした研究を行っている。著書に『東日本大震災と特別支援教育』（慶応義塾大学出版会）、「関係のなかで開かれる知的障害児・者の内的世界」（ナカニシヤ出版）、「知的障害者とともに大学で学ぶ―東北大学オープンカレッジ「杜の学びや」の取り組み」（東北大学出版会）など。

巻頭対談 道下美里×田中真理 01

巻頭言 大会の学びと愉しみ 岩壁 茂 10



装画 わたべめぐみ

Special Feature Articles

特集1 人と繋がる 責任編集：山中淑江 11

とまどいながら絆を紡ぐ	菊島勝也	12
行き合って、つらなって、行き違って、つながって。	堀田 亮	14
職場で人と繋がる	種市康太郎	16
コロナ禍でこそつながった地域でのオレンジリボン運動	菅野 恵	18
ネットのつながりについて考えてみる	山口貴史	20

特集2 心理の専門家の繋がり 責任編集：津川律子 25

職場でのつながりは連携を超えて	松本聡子	26
同門や研究会の仲間の繋がりのおかげ	加藤佑昌	28
学生相談領域での仲間との繋がり	福盛英明	30
個人的な生活での支え	人見健太郎	32

当事者に役立つ心理教育「繋がりが失われたと思うときに」 責任編集：山中淑江 38

「みんなと一緒に」の不自由と「一人になること」の自由と	樋口亜瑞佐	39
近くて遠い親と	国生まゆみ	40
つながりは多いほど幸せなのか	大島啓利	41
子育てには「終わり」があると知っておこう——子育てがつらいと感じる人へ	高石恭子	42
子どもが家を離れるとき	嘉嶋領子	43
定年退職	渡邊 悟	44
つながりが失われた時 高齢者	梨谷竜也	45

Serial Articles

こころのリフレッシュ 臨床家が和の伝統文化に触れること	湯野貴子	22
先生たちの卒業論文——滝口俊子先生	嘉嶋領子	24
心理臨床学会から 第41回大会について	伊藤良子	34
てんてん こころの広場に行く その11	細川韶々	36
WORLD MAP ロンドンでの精神分析体験	藤森旭人	46
心理臨床家の養成 放送大学	大山泰宏・桑原知子	48
帝京大学	元永拓郎・尹成秀	50
初心者のためのブックガイド		
『こころに出会う——臨床精神分析 その学びと学び方』	長沼佐代子	52
『新版 教育と保育のための発達診断〈下〉——発達診断の視点と方法』	榊原久直	53

臨床心理士資格審査の受験資格を取得することができる大学院	54
公認心理師養成機関の情報	55

追悼 鑑幹八郎先生 56

村瀬嘉代子／岡本祐子／松田真理子／内田 亮

編集後記・事務局だより 山中淑江・乾 吉佑 60

巻頭言 大会の学びと愉しみ

立命館大学 岩壁 茂

第40回大会実行委員長という大きな仕事の一つ終わってほっとしている。自分にとっても、ライブ企画の司会や運営を担当したお茶大の院生にとっても貴重な経験になった。登壇者や参加者の皆さんと一緒に作ったという勝手ながらとてもうれしい感触が残っている。

自分の研究者としての道のりを振り返ると大会はとても大きな意味をもってきた。さまざまな文献を読んでも実際に執筆者が発表するのを間近で聞くのとはインパクトが違う。また、完成品ではなく進行中の研究の経過について知るのとはとても刺激的である。毎年、大会で発表をすることを一つの目標にして研究仲間や学生と一緒に研究に取り組んできた。ただ、正直なところ、大会開催中に発表をずっと聞いているわけではない。特に海外の大会だと時差のせいで、コーヒーマグが飲みしめても、しばらく椅子に座っていると、目をつぶった覚えもないのに、時間が過ぎていくこともあるのであまり詰め込めない。むしろ、発表を少し聞いては、外のベンチに座って久しぶりに会った友人と発表について、ああだこうだ

とおしゃべりしている時間のほうが長い。そのうちに、ほかの知り合いがその前を通り、おしゃべりの輪が広がり、その日の夜の前定が決まっていくな。無駄話のようだが、そんな時間とおしゃべりから、いろいろな研究のアイデアが生まれ、その後、長い間、研究者としての旅をともにする仲間の輪が出来ていく。そんな時間が、自分の肉と血になっていったような気がする。

オンライン大会や研修会が増えて海外に向かなくなってさまざまな勉強が出来る。しかし、どうやったら、参加者のあいだにかけがえのないつながりが出来るか、そしてその学会を作っていくかと思えるようになるのか、そしてその学会の会員であることがそれぞれのアイデンティティの一部となるのか、ということを考えさせられる。Zoomで参加者全員が同じ大きさの長方形がもて、平等に参加できるチャンスが作られる。陽が降り注ぐベンチの上でのおしゃべりも、オンライン大会や研修で可能となってくれることを願うし、そんな大会が作っていかれたらなんと素晴らしいことだろうと思う。

人と繋がる

この二年余というもの、新型コロナウイルス感染拡大によってわたくしたちの生活や人付き合いの様相は大きく変化しました。当たり前であった人と会うことが制限され、繋がりや絶たれたかのように感じたり、誰かと繋がっていることの大事さに気づいたりしたことでしよう。人との繋がりについて改めて考えさせられた日々であったらとうと思えます。

人との繋がりにはいろいろな有り様があり、時にありがたく時に煩わしく、確かであったり頼りなかつたり、強いかと思うと突然消えたりします。

東京パラリンピック陸上マラソンの視覚障害のあるクラスで金メダルを獲得した道下美里選手は、「走ってる時、ロープを持つただけで本当に自由にさせてもらっているのです。まるで見えるかのように走らせてくれる、自由に羽ばたける、みたいな感覚になるのです。」と語っています。ランナーと伴走者が共に握っているロープは「絆」と呼ばれます。

四月、新しい生活の場に足を踏み入れる方は、親しい人と離れ離れになることも、新しい人と出会うこともあるでしょう。誰かと「繋がる」明日になりますように。

遙か遠い場所においても繋がっていたいなあ
2人の想いが同じでありますように

「マリーゴールド」 作詞：あさみよん

お問い合わせ：NextOne PB000052468.jp

とまどいながら絆を紡ぐ

コロナ禍の中で、学校に通う子どもたちは、周囲の人々とどんな経験を重ね、どんな気持ちを抱いていたのでしょうか。実際に子ども自身のコロナ禍での生活について、リアルな思いを聞いてみたいと思い、二人の児童生徒にインタビューを行いました。一人目は小学五年生のふうかさん（仮名）、二人目は高校二年生のじろうさん（仮名）に保護者として本人の許可を得て、オンラインでインタビューをさせてもらいました

日本大学文理学部心理学科

菊島勝也

（令和三年十二月実施）。インタビュー内容については、個人情報に関する部分は修正をして記載していません。

小学校五年生 ふうかさん

令和二年の小学校三年生の終わりの頃、コロナ禍が始まりました。通っている小学校は毎年度クラス替えがあるため、ふうかさんは「三年生ももうすぐ終わるなあ。クラスが別になる友達もいるから、さみしいな」

と思っていました。ところが、二月後半に小学校が突然休校になってしまい、お別れ会も中止になり、同級生と別れを惜しむこともできませんでした。

そんな中、大好きなダンスや合唱といった習い事を続けることは出来ていました。しかし、レッスンはオンライン、発表会も中止となり、辞めてしまう友達がたくさんいたそうです。それでも、インターネット上で発表会が出来ることになり、練習の成果を皆に観てもらえてうれしかったそうです。ただ、このような活動が実現出来たのは、ふうかさんのご両親の様々なフォローがあつてのことでした。その後、六月に再開した四年生の学校生活は、全員マスクで、給食時は黙食など、それまでの学校生活とは大きく異なるものでした。ふうかさんは戸惑いましたが、初めて同級生になった子でも顔は知っていたので、新しいクラスにも馴染めたようです。学校行事は、運動会は二学年ずつ分散して実施、学習発表会はクラスごとに動画を撮影するだけになりました。

ふうかさんは「クラスの友達とは話せるけど、クラスが別の友達とは全然会えなくなっちゃった」と感じていました。ふうかさんには仲の良い幼馴染みの友達がいましたが、クラスが別のため話せる機会が減ってしまっていました。そこで、親の管理のもと、親友とはSNSで会話できるようにしました。

ふうかさんに、この二年間をふりかえってどう思う？と聞いてみました。ふうかさんは「去年は大変だったけれど、今は慣れてきました。友達とも会えるし、いろいろなことが出来て楽しく過ごせたと思います」と答えてくれました。このように、様々な変更を強いられ、残念な思いを抱きながらも、学校生活や習い事の活動をふうかさんはがんばっていたことがわかります。その背景には、新しいクラスで同級生との関係を作れたことや、幼馴染とも付き合いを続けられたことが大きく関係していると感じました。

そして、ふうかさんが習い事を続けられたこと、幼馴染とも連絡を取り合えたこと、それらはご両親の支

えがあつて実現出来ていることがわかりました。このように、小学生には大変な状況の中でも、友人関係を保ち、保護者との信頼関係が築けていることが本当に助けになるのだと思いました。

高校二年生じろうさん

コロナ禍が始まった時、じろうさんは中学三年生の終わり頃でした。六月よりスタートした進学先の高校での対面授業では、最初から全員マスク、部活や委員会などは禁止され、お弁当は黙食と、制限のかかった高校生活となりました。一日中、全員がマスクをしているので、同級生の顔がわからないままだし、常にマスクをしていると、逆に同級生の前でマスクを外すことに抵抗感を持つ人が多くなったそうです。じろうさんも、同級生達の顔がわからないままだし、同級生にマスクを外して自分の顔を見せるのも「恥ずかしくて嫌だ」と感じてしまい、「なんか気まずいな」と思っていました。

二学期になり、家庭科の授業で皆

で協力してエプロンを作る作業をすることにになり、それがきっかけで同級生同士が知り合えて、やっと人間関係が出来たと感じられたそうです。部活動は軽音楽部に入り、バンドも組みましたが、皆でスタジオで練習することが禁じられ、文化祭も中止で発表する機会もなく、じろうさんは「つまらない」と感じていました。先輩達から、去年までは楽しく部活動がやれていた話を聞いて、「なんで僕の学年だけ何も出来ないんだ」と、先輩達を妬む気持ちを持ってしまったそうです。

二年生に進級しても、学校生活はほとんど変わらない状態でした。それでも、少しずつ部活動の練習や発表が出来るようになり、さらにSNSでやりとりして、先輩や後輩を含めて学校の知り合いも増えて、初めて恋人もできました。じろうさんが今心配していることは、先輩が卒業して自分たちが三年生になると、コロナ禍前に毎年実施されていた体育祭、文化祭、部活動といった高校での恒例行事や活動を、実際に経験した生徒がいなくなってしまうことで

す。そうすると、来年度学校行事や活動が再開されても、自分たちは「どうすればよいかわからない」というのです。じろうさんはこの二年間を振り返り、「誰が悪いわけでもないのに、やるせない。でも自分なりにがんばってきたし、仲間と楽しく高校生活を送れていると思えます」と言ってくれました。

以上のように、じろうさんはコロナ禍の中で高校生になり、初対面の同級生同士で、マスクや黙食という状況は、想像しただけでも関係を作るのが大変そうだと思いました。お互いにマスクの顔に慣れてしまうと、今度は同級生にマスク無しの素顔を見せるのが嫌、と聞いた時は驚きしましたが、一方で青年期の若者らしい感覚でもあり、この状況の影響の大きさを痛感しました。また、「コロナ前の学校生活が引き継がれなくなってしまう」というじろうさんの心配は、難しい問題であると感じました。

学校では、部活や文化祭など様々な活動が、先輩から後輩に引き継がれて行われています。その意味で、コロナが収束した時、新たな学

校の文化をどのように形作っていくかが、大きな課題であると思いましたが、

最後に

今回お話を聞かせてもらった二人は、困難な状況の中でも楽しく充実した学校生活を送っていました。しかし、現在も辛い気持ちを抱えている子ども達がたくさんいます。そのような子ども達にも、関係を作るチャンスを提供したり、人とのつながりを実感できるような支援が必要だと思っています。

行き合って、つらなって、 行き違って、つながって。

岐阜大学保健管理センター

堀田 亮

新しい環境になると、「友だちをたくさんつくりたい」と意気込む人は多いかもしれませんが。その思いは大切にしたいですが、意気込むほどうまくいかなかったり、人付き合いに疲れてしまったりすることもあるのではないのでしょうか。私が勤務する大学の学生相談室にも、対人関係で悩む学生は数多く訪れます。なかなか難しい悩みです。

大学生活で人と繋がるってどうすればいいのでしょうか？ 積極的に周

りに声掛けして、LINE交換して、「Twitter」やインスタをフォローして、サークル掛け持ちして人脈広げて、バイトも頑張つて、遊びや飲み会があれば必ず参加……まあそんなやり方もあるかもしれませんが。でも、今回はもう少し静かな世界を覗いてみようと思います。

行き合う大学生

いきなり自分の話で恐縮ですが、

私が大学生になって初めてできた「友だち」は、寮へと向かう路線バスを待っていた時に後ろから「ここから出るバスは大学に行きますか？」と声をかけてきた1くんです。お互い地方から出てきた新入生で、たまたま寮も同じ棟ということが分かりました。寮は数十棟あるのですが偶然！ それから一緒にご飯を食べたり、日用品を揃えに買い物に行ったり、新歓でタダ飯が食べられるサークルの情報（入るつもりはない・笑）を交換したりと、初めての一人暮らしの心細さを埋めてくれる大切な存在となりました。

「行き合う」とは偶然の出会いを意味します。全く接点のないはずの人と行き合う……それは道端で、たまたま近くになった授業の座席で、もしくは同じアパートの隣同士でかかもしれませんが。こういった出会いこそが、大学生ならではの「人と繋がる」きっかけのように思います。

私は勤務校で「いこまいセミナー」なるものを主宰しています。これは正課外の少人数制（10〜20名）のグループプログラムで、日常、

学修、就活に役立つスキルの獲得とともに、人と人との出会いと交流を目的に様々な内容で開催しています。「いこまい（行こまい）」とは東海地方の方言で「行ってみよう」を意味しており、気軽に参加してほしいという願いを込めて命名しました。ここで私は何人もの大学生が行き合う瞬間を目撃してきました。

調理実習の回では来月から協定校に留学する女子学生と、その協定校から来ている留学生が行き合い、リラクゼーション法の回では関東の進学校出身で一浪し不本意入学してきた男子学生と、関西の進学校出身で一浪し不本意入学してきた男子学生が意気投合し、プレゼンテーションスキルの回では中学の同級生だったけど、お互い同じ大学に進学していたとは知らなかった二人が再会しました。もちろん、彼女らは私が引き合わせようとしたわけではありません。ただ、そこに「行った」からこそ偶然の繋がりが生まれたのです。

つらなる大学生

新学期、キャンパスで新入生とishi学生たちを見た時に、私は「つらなるな」と思うことがよくあります。あどけなさときこちなさが充満したその「群れ」は繋がっているというには凝集性が低く、未成熟な印象を抱きます。こうした群れは日々かたちを変えながら、キャンパスのそこかしこに点在しています。今から一五年ほど前、大学生のラブストーリーを描いた『オレンジデイズ』というドラマが流行りました。作中に今をときめく俳優陣がキャンパス内で談笑するというシーンが出てくるのですが、当時大学生だった私と友人たちは、この「学生が集ってキャンパスで他愛のない会話をする行動」のことを「デイズ」と名付け、「今からデイズするか」「あいつらデイズってるな」と意味もなく集まることを楽しんでいました（特に芝生ですることに拘っていました・笑）。ドラマでは華やかなイメージで人と人との深い関係性が描かれて

いましたが、そうではなくとも、こうした「つらなる」行動には意味があるように思います。

対人関係で悩み私のもとを訪れた学生が、誰かと一緒に教室移動している時は安心すると話してくれたことがありました。そこに何か深い会話はなくとも、行動を共にすること「つらなる」ことで所属感を得ていたようです。これを人との繋がりと呼べるのか、ましてや友だちと呼んで良いのかという意見はあるかと思えます。ただ、そこに「居る」という事実によって繋がりを感じられることもあるようです。友だちづくりは苦手だけど友だちはほしい、そんな人はまずはどこかにつらなることから始めてみても良いかもしれません。

行き違つ大学生

「行き違う」には、相手と出会わないという意味と、意志が通じず誤解や食い違いが生じるという二つの意味があります。大学での人間関係はこの両方が起きるように思います。大学には学級という括りがない、ま

たは弱いので、たまたま仲良くなつた人でも履修科目や生活スタイルが変われば疎遠になることが起きてきます。実験や実習のグループで仲良くなつても、その授業が終わつたりグループが変更されたりすれば連絡を取り合うこともなくなり、バイト

のシフトが重なれば話すけど、一緒に入ることがなければ会話することもなくなる、そんな薄くて脆い関係性は大学生活の中では多く存在します。また、これはどの年代でも起こることですが、とても深い仲だったとしてもちよつとしたきつかけで関係がこじれてしまうこともあるでしょう。

私がお会いする学生の中にも、大学一、二年生の頃は人とつらなり、繋がることに一生懸命だったけれど、三年生くらいになるとその関係性に疲れ、一人になれる時間を大切にしたいと、あえて人との距離を取ろうとする人がいます。本稿のテーマと真逆のことを言うようですが、大学生（青年期）は孤独を感じ、抱えることを学ぶ時期でもあるのです。そして、人との行き違いがあるからこそ、自分

にとつて本当に繋がりたい人が見えてきます。

繋がる大学生

昨今は新型コロナウイルス感染症の影響によって、私たちは人との繋がりを再考せざるを得ない事態にも直面しています。「袖振り合うも多生の縁」の袖を振る機会は奪われ、つらなることにもまだまだ制限や制約が課されています。しかしながら、オンラインの活用など大学では新たな繋がりが模索されています。そして、いつの日かキャンパスに活気が戻った時には、行き合い、つらなり、そして時には行き違いながら、学生には人との繋がりを感ずるほしと願っています。

職場で人と繋がる

新型コロナウイルス感染拡大と オフィス環境の変化

新型コロナウイルス感染の拡大は、オフィス環境（働く環境）を急変させました。感染拡大防止のために、アクリル板や透明ビニールカーテンなどの設置、一定の距離を保った座席配置、換気の徹底が求められました。また、労働者自身も勤務中のマスクなどの着用、検温、手洗い、消毒が求められました。厚生労働省の

桜美林大学

種市康太郎

「人との接触を八割減らす、一〇のポイント」という提言では、労働環境におけるテレワークや在宅勤務、オンライン会議が推奨されています。人との接触が減れば、人との繋がりが持ちにくくなるのが推測されます。新型コロナウイルス感染拡大が始まった二〇二〇年三月に実施されたパースル総合研究所の調査では、テレワーク労働者の二八・八%が「私は、孤立しているように思う」と回答し、孤立感ではテレワークの割

合が高いほど強くなる傾向にあることが明らかになっています。テレワークには良い面も多くありますが、繋がりという点では課題があるようです。

新たな繋がりを作ることの 難しさ

私自身が相談やコンサルテーションを行う企業・組織においてコロナ禍後に感じるのは、若年層の孤立感です。特に、新人や二年目の社員では、入社からオンラインやオンデマンドでの研修を受講し、同期入社の仲間と対面であつたのはまだ数回しかない、という方もいました。

つまり、テレワークは、もともとあつた繋がりを保つことはできても、新たな繋がりを作るには難しい面があるのだらうと思います。特に、社会人経験が少ない場合にはその傾向があるのだらうと考えられます。ただ、新入社員だけでなく、中途入社や異動や転勤後の社員でも同様の傾向があります。コロナ禍がもたらした影響は、職場での繋がりを作る機会の喪失と言えるかもしれません。

それでは、職場の産業保健スタッフやカウンセラーが相談に乗ればよいではないか、と思われるかもしれませんが、しかし、厚生労働省の労働安全衛生調査によれば、ストレスを相談できる相手、および、実際に相談した相手ともに「家族・友人」が約八割、「上司・同僚」が約七割を占め、産業医、産業保健スタッフ、カウンセラー等は一割未満です。やはり、専門家への相談は敷居が高いのだらうと思われれます。

助けを求められない心理

このように、繋がり作りの困難さはコロナ禍という環境面の影響があると言えますが、一方で、個人側の要因もあります。心理学では、助けを求める行動を「援助要請行動」と言いますが、助けを求められない人には特有の心理があることがわかっています。例えば、過去に多くの失敗を経験し、回復意欲や自尊心が低下している。援助を断られたり、相談で嫌な思いをしたりした経験がある。相談先や相談方法に関する知識

がない、などです。労働現場でも、相談相手となる上司・同僚自身がストレスの原因であることや、相談先で自分がどのような扱いを受けるかわからないということから、相談をためらうことが考えられます。

一方で、助けられ上手な人もいます。このような人を被援助指向性が高いと言います。コミュニケーション能力の高い人や、過去に相談をして良い経験をした人にはこのような傾向があると言われています。このような人たちは、繋がりを作ったり周りに適度に助けを求めながら仕事を進めたりすることが比較的容易にできます。しかし、このような人たちを基準にして、特に何も対策を取らなくても大丈夫と考えるのは早計でしょう。コロナ禍の影響には個人差があり、孤立しやすい人もいますという前提での対策が必要だと思えます。

繋がりに作りにチャレンジする 企業・組織

企業・組織の中でも、主に人事部門や健康管理部門を中心に、社員の

特集①人と繋がる

繋がりを作る取り組みがなされています。

まず、オンラインでの社員間のコミュニケーション機会の提供です。社員同士では、オンラインでの朝食、ランチ会、オンライン飲み会などがあります。このような会の心理的影響は不明ですが、いずれも、適度な時間で切り上げることが重要であるように思います。また、オンラインと対面が混じる場合は、オンライン側が疎外感を感じやすいので注意が必要です。同部署、同期だけでなく、



部門横断で境遇が近い者同士、趣味が同じ者同士など、さまざまな次元で会を作る試みもあります。

次に、上司（管理監督者）とのオンラインでの面談機会の提供があります。上司とのミーティングは、最近、「1on1ミーティング」という名称で行われるようになりました。しかし、結局のところ、上司の部下に対する対面での相談対応能力が低ければ、名称を変えても、オンラインになっても良い結果にはならず、むしろ、ストレスになります。特にオンラインは周りの目がないため、やり取りがブラックボックス化する危険性があります。上司を対象とした研修機会を提供したり、上司同士が話し合える場の提供が必要でしょう。比較的年代の近い同部署の先輩が相談や指導を行うメンター制度を導入する企業もあります。これも相談や指導について十分な研修機会が提供されなければならないと思えます。

第三に、相談窓口の提供です。こちらにも、オンラインやメールの活用が行われるようになりました。オ

ンラインやメールでの相談は以前から行われてきましたが、その活用度や重要性が高まってきたと言えます。オンラインの研修機会も増えました。このような場を活用し、相談窓口を周知し、相談者の顔を見せることが大切だろうと思います。

以上、職場での繋がりについてお話ししました。最後に、繋がりにおける自発性について述べたいと思います。「コロナ禍で飲み会がなくなってコミュニケーションが減った」という声は上司側に多く、若手からはあまり聞きません。労働者によって望ましい繋がりのあり方は異なるのだらうと感じます。繋がる先、繋がりが方、繋がる頻度を選択できると、自発的に選べるのが重要であるように思います。

●参考文献

パーソル総合研究所(二〇二〇)「テレワークにおける不安感・孤独感に関する定量調査」
<https://rec.persol-group.co.jp/thinkrank/dtara/relwork-anxiety.html>
水野治久監修(二〇一九)『事例から学ぶ心理職としての援助要請の視点——「助けて」と言えない人へのカウンセリング』金子書房 関谷裕希「事業所内の相談窓口における援助要請」八〇〜八七ページ

コロナ禍でこそつなごう 地域での オレンジリボン運動

児童虐待問題をいかに学ぶか

私が子どもの頃からライフワーク
になっている地域の祭礼への参加が、
コロナ禍のため二年連続で中止にな
ってしまいました。年二回、約四ト
ンの重量のある江戸型人形山車を曳
きながら、子どもから高齢の方ま
で一緒になって盛り上がります。私
自身、地域で育まれてきたという心
地よい感覚があったからこそ、子ど

もの生活の場での心理臨床に関心を
向けてきたのかもしれない。

長年、児童養護施設にて虐待を受
けた子どもの心理療法を担当しなが
ら調査研究に打ち込んできました。

ところが、二〇一五年に着任した大
学でゼミを担当することになり、児
童虐待問題の学びをどのように進め
ていくか悩む日々でした。地域で起
きる切実な児童虐待の問題を、自分
の身近なこととして受け止めていく
にはどうすればよいか。もどかしさ

和光太学

菅野 恵

を感じていた頃、大学のホームページ
をぼんやり眺めていると芸術学科
の学生がオレンジリボン運動の公式
ポスターデザインコンテストに入選
したというニュースが目飛び込ん
できました。

オレンジリボン運動とは？

オレンジリボン運動は、栃木県小
山市で起きた虐待死事件をきっかけ
に地域の団体から生まれた児童虐待
防止の啓発活動です。関心を持ちオ
レンジリボン運動の事務局に問い合
わせたところ、「よかつたら『学生
によるオレンジリボン運動』に参加
しませんか?」と誘ってくれたので
す。ゼミ生に相談すると不安な表情
を見せながらもゼミとして参加する
ことになりました。調べてみると、
全国各地の大学や専門学校が、大学
祭などのイベントブースでのPR、
地域でのチラシの配布などに取り組
んでいました。うちのゼミでは何が
できるか? せっかくなので他のと
ころがやっていないことを試みてみ
よう、と企画を練っていきました。

まず取り組んだのは、大学図書館
にある児童虐待関連の本を紹介する
POP制作でした。一年目は大学の
展示コーナーに飾るだけでしたが、
翌年になると大学近くの公立図書館
に協力してもらい、児童虐待防止の
チラシを配りながらPRするように
しました。そこで気づいたのは、児
童虐待という文字を見るだけで逃げ
るようになってしまっている存在
です。仕事上では児童虐待という言
葉に耐性のある人たちとかかわって
きたのであまり意識しなかったこと
ですが、地域のさまざまな眼差しが
あることに気づかされたのです。

一方で展示に時間をかけて目を通し
て感想を述べてくれる方や、乳児を
抱きかかえながら「こういうPR
って大切ですよ」とコメントして
くれる方もいて、ゼミ生たちはしだ
いに手ごたえをつかんでいきました。

コロナ禍が転機になった地域での展開

二〇二〇年度はコロナ禍で学外で
の活動がまったくできず、ゼミ生た
ちは肩を落としていました。しかし



カフェのコミュニティボード

市職員が地域の大型商業施設でPRできるように働きかけてくれて、思いがけず地域での活動の幅が広がっていきました。そこで、大型商業施設内にあるカフ

めげずにTwitterやInstagramでオンラインボン運動に関連した一分動画を制作し、近隣の大学の学生団体からも協力を得て拡散してもらいました。ただTwitterでは「いいね」の数はわかりませんが、あまり感触がつかめません。大学はオンライン授業に切り替わり、ゼミ生たちが打ち合わせのために対面で集合できたのは一回のみ。学外活動ができなかった悔しさを先輩に託すことになりました。

二〇二一年に入ってから私の研究室に一通のメールが送られてきました。地域の子ども家庭支援センターからでした。「ゼミ生のTwitterを見ました。もしよければ何か一緒にしませんか?」と声をかけてくれたのです。おそらくコロナ禍でなければ積極的にSNSを活用しなかった中で、コロナ禍でこそつながることができたと感じています。市職員とゼミ生が数回ミーティングを行い、地域での新たな企画を模索することになりました。ミーティングで浮き彫りになったことは、子育てで本当に困っている人たちが相談に来てくれない実態や、虐待が疑われるような家庭に手を差し伸べても拒否されるといった現状でした。そこで子育て支援の場を身近に感じてもらうためのPR方法について、ぜひ若い感性

で取り組んでもらいたいということでした。市職員が地域の大型商業施設でPRできるように働きかけてくれて、思いがけず地域での活動の幅が広がっていきました。そこで、大型商業施設内にあるカフ

交流の輪と可能性の広がり

エの店長とゼミ生が交渉し、店内のコミュニティボードに子育て支援のメッセージを書かせてもらうことに。サイトに接続するQRコードを貼り付けて子育て支援センターやゼミのTwitterにつなげる工夫もしました(写真参照)。ボードには虐待という言葉を使わないようにし、子育て支援や児童虐待通告ダイヤル「189」を目立たせました。カフェの店員には、オレンジのネームプレートを掲げていたなど協力してもらいました。

土日になると長蛇の列になるカフェには、子育て世代のお客さんがQRコードをスマホで読み取ってくれていると報告を受けました。実際、乳児を育てているという母親からTwitterにメッセージが届き、「福祉の情報は本当に必要な人に行き届きにくいけど、パパやママたちのリフレッシュする場にボードが設定されていってとても素敵を試みてですね!」といった反響をいただきました。チラシセットの配布を受け取ってもらえなくて暗い表情でいたゼミ生も、メッセージを読んで励まされていました。また、ゼミのTwitterの活動報告を見た生涯学習センターの職員もイベントの応援に駆けつけてくださったのですが、生涯学習センターが企画している学生イベントにも誘っていただき、交流の輪がどんどん広がっていきましました。

さらに、オンラインボン運動をきっかけに児童養護施設でボランティアをはじめたことで、ゼミ生が数名施設に就職するようになりました。今では心の傷を抱える子どもたちのケアの最前線で卒業生が活躍し嬉しく思っています。また、子どもの現場での心理職を目指して大学院に進学する者も増えました。コロナ禍でも地域の人たちとつながる努力をしてきたゼミ生からは、たくさん刺激をもらっていますし、学生の活動を応援してくださる地域の方にも感謝しています。児童虐待の啓発の難しさを痛感しながら、これからもゼミ生と共に学んでいきたいです。

ネットの つながりについて 考えてみる

愛育クリニック／あさみ野心理オフィス

山口貴史

ネットは人とのつながりを
広げる？ 狭める？

『竜とそばかすの姫』（細田守監督、二〇二二年公開）という、母親の死によって歌を歌えなくなった女子高生が主人公の映画があります。高知県の山深い集落に父親と二人で住む主人公は、ひよんなきっかけから全世界のアカウント数が五〇億を超えるネット上の仮想空間の中で自分の分身（アバター）を作ることになり

ます。その分身であれば歌を歌うことができようになった彼女の歌声に全世界が反応し……と話は展開していきます。

このようにネットのつながりによって人生がドラスティックに変化した人は、もはやアニメーションの中にとどまりません。シンガーソングライターの藤井風は岡山県里庄町という人口一万人規模の小さな町出身ですが、彼が無名時代に YouTube にアップした弾き語りの動画は世界

各地で視聴され、なかにはドイツの黒人女性のように彼の演奏をカバーして動画をアップする人もあらわれました。こうした物理的な制約を超えた人と人とのつながりは、ネットなくしては起こらなかったでしょう。

このような大それた話でなくとも、今や高校生の約五割はネット上だけの知り合いがいる時代であり（デジタルアーツ、二〇二〇）、同じ趣味をもつ人たちを中心にネットはこれまで私たちがもちえなかったつながりを生み出しています。つまり、ネットは私たちの人とのつながりを「広げている」と言えそうです。しかも、「隣の高校の誰か」でなく、「名も知らない都市の誰か」という予想もしないようなつながりを加速度的につくり出しています。

一方で、ネットは人とのつながりを実は「狭めている」という意見もあります。

社会学者の土井隆義（二〇二〇）は子どもたちのネットの使用について述べる中で、「本来、時間と空間の制約を克服することで、人間関係の流動性を促したはずのネットの発

達か、逆に人間関係の幅を狭め、価値観の共有できる相手だけとの同質的な関係を促す背景にもなっている」と指摘しています。

例えば、学校で親しくしている友人と帰宅後もLINEで通話したり、Twitter やインスタでつながったり、一緒にオンラインゲームをしたりなど、学校という限られた時間と空間を超えて絶えずつながり続けることが可能になっていきます。言い換えれば、学校の関係から「抜ける」時間がなくなるため、その居場所は今まで以上に絶対的なものとなり、凝集性が高くなります。必然的に自己と価値観や趣味が似通った人たちとだけ付き合うようになるため、関心を抱く対象も生活圏も狭窄化した結果、人間関係が狭まっている子どもが存在するというわけです。

ネットのつながりについて
考えてみる

さて、ここまでネットにおける人とのつながりについてみてきましたが、ネットには人とのつながりを広げうるし、狭めうるという性質があ

りそうです。こうした点を踏まえた上で、ここからはネットのつながりについて筆者なりの考えを述べようと思います。

一つ目は、ネットだからこ他者とつながれる人も存在するということです。ネット上でのつながりは、リアルな関係と異なってその場にいる感覚などの身体性が伴わない、ブロックやミュートなどボタン一つで関係を切つてしまえる、といった批判がなされることがあります。言い換えれば、(リアルと違って)「本物のつながり」ではないというわけです。しかしながら世の中にはさまざまな事情から(リアルでの傷つき体験があることが多いですが)、リアルな人との関係に耐え難い生々しさを感じたり、ボタン一つで切れない関係に逃げ場のない怖さを抱いたりするがゆえに、他者とながれぬ人たちが存在するのです。その人たちはネットという媒介があるからこそ他者とながれると言えるかもしれません。

先と同質性の話にも通じますが、『弱いつながり』(幻冬舎、二〇一四)という著書の中で哲学者の東浩紀は、ネットはその人が所属するコミュニティ内の人間関係といった強い絆を強くするメディアであり、「たまたまパーティーで知り合った」というような偶然の出会い、すなわち弱い絆を得ることが難しいと指摘しています。

例えば、筆者はふらっと入ったうどん屋があまりにおいしいお店だったので、何の気なしにカウンターに並べられていた日本酒を飲んでみました(日本酒は嫌いだったので普段なら絶対に頼みませんでした)。その日本酒は衝撃的なおいしさで、それ以来、その店主に日本酒について教えてもらいながら、旅先で酒蔵を巡って日本酒の手ほどきを受けるほどに日本酒にはまるようになりました。これは些細な例ですが、この体験は筆者が「予想していない方向」に確実に世界を広げてくれました。つまり、偶然性や予測不可能性があることで、どこにいくか分からないということです。一方、先に述べたよう

なネットの「予想のつかなさ」とは、あくまでも「同じ趣味の」とか「同じ好みの」といったある範囲内で物理的・時間的制約を超えたネットワークを構築できるという意味であると言えます。

このように考えていくと、ネットのつながりとリアルなつながりのどちらがより優れているとか、より良いとかいうものではないように思えます。どちらにも良さと限界があり、そもそも他者とのつながり方の質が異なると言えるでしょう。ネット中心の人もいれば、リアル中心の人もいますし、その間を行き来する人や一時的にどちらかが中心になる人、さまざまな人がいてよいのでしよう。

「生肉」のSNS、面倒くさいぞ!

最後に蛇足的に述べると、ネットでもリアルでも、結局のところ人とのつながりは面倒であるという点は同じかもしれません。どちらでもいじめやトラブルは起こりますし、自分が思ったように他者は動いてくれないし、人と気持ちが行き違ったり

もします。そのため、悲しみや怒り、苦しみなどさまざまな感情が湧いてきます。でも、『逃げるは恥だが役に立つ』(海野つなみ著、講談社)の「面倒を避けて避けて、極限まで避け続けたら……歩くのも、食べるのも面倒になって、息をするのも面倒になって……限りなく死に近づくんじやないでしょうか? 生きていくのって、面倒くさいんです」という平匡さんの言葉を思い出すと、人間である以上はこの面倒くささからは免れることはできないのかもしれない。

人とのつながりがリアルだけでなくネットの中にもある、あるいはネットの中にこそある時代に、この原稿がネットのつながりを考えるささやかなぎっかけになると嬉しいです。

●参考文献

- デジタルアーツプレスリリース(二〇二〇年四月) 第13回未成年者の携帯電話・スマートフォン利用実態調査 https://www.daj.jp/company/relase/2020/0407_01/
- 土井隆義「ネット社会の関係病理……つながり依存と「はじめ問題」『この科学』(二〇二〇年五月号) 日本評論社

臨床家が和の伝統文化に触れること

桜美林大学大学院 / 静岡大学大学院 湯野貴子

臨床家とリフレッシュ

普段の生活の中でも元気を回復することは日々必要です。軽く体を動かす、美味しいものを食べる、お笑い番組を見て大笑いする、家族と過ごす、なども日常の中での私の大事なリフレッシュですが、臨床家として、苦しみや悲しみ、葛藤に寄り添う中では、意識して元気を多めに補充しておく必要があります。特に子どもの臨床が専門の私は、子どものエネルギーや変化の速さに触れるので、そこに楽しさや喜びがある

とは言え、体力気力ゲージの減りも速いように思います。災害支援の活動に携わることもあり、そこで感じる言葉にならない感情を自分で理解して消化するには、積極的に意識してリフレッシュしていくことが大事です。

着物を着ることとリフレッシュ

臨床家としてのリフレッシュという視点で言うと、私にとっては「着物」を着ることがその一つの方法です。祖母や母から譲り受けた着物は

箆箆に眠ったままの時期が長く、どこか気にはなりつつも、現代の生活の中では積極的に着る機会はないままでしたが、あるとき、なぜか不思議と「着物を着たい」と感じるようになりました。子どもたちが遊びの中で、あまり考えることなく気になるおもちゃや遊びを無意識に選び、自分に必要な体験をその中で探り当てていくように、私も着物を手にとったような感じです。

着物を着るようになって感じるのは、洋服と比べて動きが制約され、全然早く動けないということ。歩幅も小さくなり、ものを取るときも長い袂で周りのものをなぎ倒さないように袂を軽く押さえるなど、いつもとは違う体の動きが求められます。普段の私はいつも何かしら気ぜわしく、常に移動は小走りという生活なので、こうした着物の制約によって必然的に生じる「ゆっくり動くこと」が、私にとってはとても気分をゆったりとさせてくれます。ゆったりすること、時の移ろいや今という瞬間を深く感じる充実感にもつながるようです。まさにマインドフル



着物と和の文化について、臨床家の集まりで楽しく話しました

ネス。着物を着ることが「普通」のことというよりも「非日常」に近い感覚なのも、日常のあれこれから離れるリフレッシュ効果を高めているのでしよう。さらに和服は腰回りに紐をキュッと締めて、帯で背中を支えるので、丹田に力が入り、自然と良い姿勢になります。「ゆっくり」だけど「しっかり」。まるで理想の臨床家の姿のようです。

舞の世界に触れる

着物を着るようになると、和の伝統文化にも関心が湧いてきます。歌舞伎、落語、お茶など、気になるものをいろいろ体験してみると、古典の世界が逆に新鮮に感じられること

もあり、その非日常感がリフレッシュにつながります。浅い知識での、あくまで私的な体験ではありますが、日本舞踊もまた臨床家にとつていろんなリフレッシュ効果があるように思います。少々マニアックな話になりますが、日本舞踊にも色々なジャンルがあつて、舞と踊りの違いも実はあります。踊りが大きな派手な動きが多いのに対して、舞はお座敷で舞妓、芸妓の芸として発展してきたので、動きも埃を立てない静かな抑えたものが多いとのこと。私は、舞の中でも特に「地唄舞（じうたまい）」とか「地唄もの」と呼ばれるジャンルに魅力を感じ、少しお稽古したりもしています。



扇とお稽古ノート。舞の振りや連想などを書き留めています

「地唄舞」では、普遍的な心情が抑えた動きで表現され、特に悲劇的な状況が描かれることが多く、何もかもを失った女性が出てきて、「失った」状況から曲が始まり、その心が曲と振りで様々に描かれます。例えば、有名な地唄の一つ、『芦刈』は私も好きな舞で、愛する人を失った女性の心を、水辺の自然を豊かに描く叙景的な歌詞と振りの中で表現していきます。

歌詞だけではわかりにくい心の機微が、幾度も舞う稽古をしていると、その振りを通して、自分の中に湧き起こってくる感情に出会います。明確にわかりやすい悲しみの表現（よよと泣き崩れるとか）は一切ありません。例えば、白鷺が飛んでいくのを見る視線や動きの中に、「今」という時をとどめたい気持ち、先に進みたいけどどうしても進みたくない足の運び、浜辺の荒々しい松風にもまるで自分になるかのような扇の動き、一つ一つの振りから、迷い、葛

藤、決意、絶望、願望、そして悲しみと愛情を感じとれます。そうは言っても、こういう気持ちを表現しよう、と考えて舞うことはなく、上げる手の高さ、体の傾け方、首の角度、視線、という一つ一つの動きを師の通りに真似して、ただ正しくその動きを再現できたときに、初めてその気持ちが湧いてきてハッとする体験がとても不思議です。まるで自分の無意識にあつたものを自分の動きで見えるかのような面白さがあつて、舞うたびに新鮮な驚きがあります。

象徴、イメージと心の回復… 古典的な象徴に癒される

このように地唄舞には、雪、滝、月、花など、自然が詠み込まれていることが多く、歌詞と振りの中に多くの象徴があり、その連想から深い気持ちを感じます。子どもの臨床では特に、子どもは象徴を多く使って自分の心を様々に表現する中で、成長や回復を見出すことが多く、それは、大人にとつても大事な心の機能です。伝統文化でなくとも、物語や詩、音楽、一枚の絵などから、私た

ちは豊かに象徴と連想を得て、心を分かち合い、回復していく支えにするのだと思います。

私はある地唄の「月」を表す象徴的な振りがとても好きなのですが、扇を開いて、そこに月を映し出し、扇に映った月を胸に優しく抱くようにするので、その動きをした時、いろんな連想が一瞬で心に湧いてきます。去つてしまつた遠く愛しい人を想う気持ちなのか、静かな夜の月の光が私に寄り添ってくれている慈悲なのか、とにかくじんわりと心に何かが溶けていく、そんな体験があります。私にとつて、とても印象的で大事なイメージ、象徴の一つです。さらに和の伝統文化はジャンルを超えた連なりがあり、舞から能、浄瑠璃、落語、和歌などを広く知ると、一つの象徴からの連想が無限に広がります。昔にタイムスリップして、先人が苦しみを昇華するために紡いできた象徴や連想に触れ、時空を超えた受容と共感を得ることで、今の心の元気を回復する、それが和の伝統文化で私を感じているリフレッシュなのかなと思います。

心理臨床の先達の卒業論文はどんなテーマで書かれたのか？ そのテーマはその後、日本の心理臨床の発展に長く貢献してこられた、滝口俊子先生にお話を伺いました。なおインタビューはCOVID-19の感染急拡大を受けて、オンラインで行われました。

●学業不振児に寄せる思い

私が滝口先生に最初にお会いしたのは、本学会シンポジウムの司会をしておられるときでした。鈴を転がすような美声と、笑顔を絶やさない優しい雰囲気と同時に、確かな司会進行と凛としたたずまいから、芯に秘めた強さも伝わってきました。インタビューの冒頭で、その印象をお

伝えますと、「あら、わたくしは自分の強さを悟られないように、ずっと気をつけていたのに」と笑っておられました。先生は、父親が洋画家、母親が教師という家庭に育ちました。母親の関係から学費免除だった立教女学院中学・高校の在学時に、アメリカで学んだ牧師の側垣正巳先生から「今後の日本も心理学が必要になる」と勧められて、立教大学文学部心理教育学科に進学します。

卒業論文は、指導教授の佐々木剛先生

から「立教小学校・立教女学院小学校の昭和三二年入学生を一六年間、追跡調査したデータを分析したら？」という勧めを受けて、小学校四年間の矢田部ギルフォード性格検査と国算理社四教科の成績との関係について考察したものでした。当初は児童全員のデータを検討していましたが、次第に学業不振児に着目するようになります。

その経緯について、先生は成績優秀な兄姉と、母親に溺愛された弟との間で、幼少期に感じ続けた劣等感が影響していると自己分析されます。また父親が三七代目という家であったために、「跡取りの男の子が尊重されて、女の子は葛藤が多い子ども時代だったことも影響していると思う」と語られました。

「統計処理をしていないことが引け目だった」にも関わらず、学科長の豊原先生が「良く書けている」とほめてくださったそうです。先生は「後で振り返れば、臨床心理的な感性が評価されたのかと思う」とおっしゃいます。当時の心理学は実験心理学が主流で、「感性など、非科学的だ」とされていました。おそらくは都会の私立校で、親の期待を背負いながら学業不振に苦しむ子どもたちに寄せる、先生の温かさと考察の深さ、細やかさと

が評価されたのだらうと思います。

卒業後は、母親の教え子である佐藤紀子先生を通じて、たまたま慶應義塾大学医学部神経科で「クリニカル・サイコロジスト」を募集していることを知り、そこで同期の深津千賀子先生や精神科医らと訓練を受けるうちに、「知識不足」と思い至り、立教大学大学院に進学されました。

修士論文は小此木啓吾先生の指導のもとに慶応病院で行った「学校恐怖症」（「不登校」という言葉はまだありませんでした）女兒の遊戯療法の事例研究でした。事例研究という研究手法が世に認められる以前のことであり、「医療における症例研究に近いものだった」と先生は振り返られます。

●二つの世界を結ぶ

質問紙法である矢田部ギルフォード性格検査は結果の処理も定式化されており、より表層的な心理状況が測定されるものです。そこから深い心理状態を読み取るには、優れた臨床心理学的感性が求められます。表層と深層、性格類型と学業成績の二つの世界を結び付け、俯瞰し、考察する卒論からスタートした先生のあり方は、その後の臨床家人生においても如



何なく発揮されています。

小此木啓吾先生のもとでフロイト派の河合隼雄先生のもとで夢分析と箱庭を中心に二一年間、七五四回の教育分析を受けられました。河合先生は東洋と西洋を結ぶ論考に幾多の業績を残しておられます。小此木先生は「本来ならば破門もの」とおっしゃったそうですが、「本来」をも覆してしまう、しなやかさと芯の強さが滝口先生の臨床の真骨頂であり、その萌芽を卒論に見る思いがします。

滝口俊子（たきぐち・としこ）

立教大学文学部心理教育学科卒業。立教大学大学院修了。立教女学院短期大学、京都文教大学、放送大学大学院で教鞭をとる。放送大学名誉教授。心理臨床場は医療・教育・私設心理相談など。二〇一一年度日本心理臨床学会賞受賞。

心理の専門家の

高校生にとって、カウンセラーは、スクールカウンセラーを代表として、何をやっている人なのか皆目見当がつかない、という存在ではないと思います。ところで、よく私（カウンセラー）が訊かれる質問のひとつに、「朝から晩まで他人の話を聴いていて、疲れませんか？ ご自分のストレスはどう解消しているんですか？」といったものがあります。確かに日本において国策として、元々メンタルヘルスが頑強な人が選抜されて、心理カウンセラーになっているということでは全くありません。どちらかというと「類は友を呼ぶ」ではありますませんが、心理的に苦しい思いをしたことがある人たちが、心理学に興味をもち、心理臨床家になっっているような気もしないでもありません。

そうすると、「自分のストレスをどう解消しているの？」という素朴な問いへの回答としては、心理臨床家になるための実習を含む訓練や、臨床心理学や関係学問の知識や技能の修得（及びそれを自分に応用すること）が重要である、とい

うのが模範回答なのかもしれません。

しかし、私たちは、カウンセラーである前に、当然のことながら、生身の一人の生活者です。この特集にあるような「職場でのつながり」「同門のつながり」「同じ領域のつながり」「個人的な生活でのつながり」は、そのまま多くの生活者にとって、家族（人間以外を含む）や友人、同業者、同じ学校・職場、そしてコミュニティでのつながりに通じることと思います。その意味で、この特集は、みんなに共通する日常の話題といえるかもしれません。心理臨床家が書いているからといって、ものすごく特別な話が展開されている訳ではありません。しかし、プロフェッショナル（心理臨床家）にとって、自分自身を支えるセイフティネットを作っておくことは、実は何にも増して重要なことなのではないでしょうか。

繋がり

日本大学文理学部 津川律子

職場でのつながりは 連携を超えて

国見台病院 松本聡子

はじめに

私は、何日も他者と言葉を交わさなくても苦になりません。正直なところ、排他的になりがちな集団心理が煩わしく、子どもの頃から苦手です。しかし一方で私は、他者が存在する喜びも知っています。ひとりで体験できることには限りがあります。他者との間で動くところを感じると、生きていく実感が溢れます。

職場という集団の中にいると感じるのは、「連携」という言葉を超えていく、仲間とのつながりです。私はそのつながりを、愛おしく思っています。

苦い原体験

大学院を修了してすぐに、今の職場に入職しました。直後に始まった研修期間で、ある病棟へ入った初日の夕方の出来事でした。それまで気さくに会話していた看護助手の方々（念の為に付け加えると、現在は退職されています）が、私の出身大学を知るやいなや「へえ、頭良いんだ。どうせ親の敷いたレールの上を歩いてきたんでしょ？」と言ったのです。

努力して主体的に選んできた進路だったのに、「私のことを何も知らないのに、どうして急にそんなことを言われるのだろう？」と咄嗟に思ったものの、怒りや傷つきの感覚よ

り先に、疑問が湧きました。直感的に、ここには何かしら考察すべき事態が複数の次元にわたってあるぞと感じたのが、他職種との関係の原体験でした。

集団を理解すること

苦いスタートでしたが、社会人となり、専門家として働き始めているのですから、個人的な好悪の感情ではなく、何が起きているのかを考えることが必要だと当時から私は思っていました。すべてを個人の資質に返すことは安直なので、まずは集団を理解することが重要だと感じました。

マクロ的に職場の組織を知っていくことから始まり、医療現場という

国家資格集団の各々の視点や役割の異同、集団力動、個々人のキャラクター、そしてなによりも治療環境に影響を及ぼす患者の病理への理解。それらのことを日頃から意識し、思考するようになっていきました。手がかりとなったのが、精神分析の学びでした。

次第に担当患者が増えてくると、自ずと各職種のスタッフとのやりとりが増えるわけですが、駆け出しの私には、確信を持って伝えられることには限りがありました。失敗をして注意されることは山のようにありましたが、様々な投影を受けて理不尽さを覚えることもありました。チーム全体が患者の壮大な再演に飲み込まれ、治療者としての圧倒的な無力感に耐え難かった経験もたくさん

あります。そうして、集団を知ることと同時に、自己理解もより重要になっていきました。

数年経ったある日、ひとりの看護師が「初めて担当患者さんの心理検査の結果を説明してもらった時から感じていたのだけれど、松本さんは絶対に患者さんのことを悪く言わないから、信頼できると思っていただいた」と伝えてくれました。その思わぬ言葉に、実は見守られていたのだということと、無自覚だった自分の姿を言語化してくださったことに、驚きと喜びを感じました。

関わりの難しい患者の治療にチームで取り組んできた日々が、互いを理解することを推し進めてくれました。苦楽とともにすると、人と人は結びつきを深めることができます。治療場面での困難に苦しんでいる時こそ、私は周囲のスタッフに励まされてきました。

心がけていることと、その意味

職場での人間関係で心がけていることは、年齢、職種、役職、経験と

いった違いにはとられずに、分けてなく一定の態度で接することで。わかまえることや礼節に配慮することは大前提ですし、関係性の深さや相性もあるので、誰に対してもオープンでいるということではありません。そして、「みんな仲良し」といった万能感や樂觀は持ち合わせていません。肝心なのは、自己境界の持ち方と、情緒的な安定性、そして前向きさです。

私は敬語と砕けた口調を織り交ぜることが多いのですが、率直に対話するというのは、馴れ合うこととは異なります。議論すべきと判断したことについては意見をしますし、説明責任を強く意識しています。親しいスタッフとの場合、個人的な友人関係を仕事上に極力持ち込まないよう、に自戒的に注意を払っています。

日常では、日々の各部署の忙しさや最近の動向に目を配り、集団と個の状況を観察して、さり気なく声をかけ、耳を傾け、労をねぎらうようにしています。出しゃばりすぎず、大げさでなく、言葉を選んで……と考えていくと、心理療法と共通した

根幹があるように思います。語らうとするほど押し付けがましくなりますし、わかかって欲しいという前のめりの姿勢は独りよがりになりがちです。これらは、過去の自分に対する反省から生まれているものです。

経験年数を重ね、管理職の立場でもあり、若手スタッフには緊張されてしまうことがよくあります。しかし他のスタッフ達が「松本先生は厳しく見えるかもしれないけれど、優しいから仕事のこと以外でも話した



方が絶対に面白いよ」などと声をかけてくださっていて、私がいなくていいところで随分とアシストしてくれているという事実を耳にすることが度々あります。もちろん批判があることも重々承知ですが、どちらか一方ではなく、どちらもあることが自然なことでしょう。

なぜこのようなことを細かに考えているのかといえば、すべてが治療環境を整えることに繋がっており、患者に還元されると考えているからです。

そしてもうひとつ大事なことは、私は仲間と楽しく真剣に働きたいのです。臨床現場では、困難が必ずやってきます。普段から交流できない相手に、緊急時や本場に助けが欲しい時に、どうして本音で話してくれるでしょうか。本気で助けてくれるでしょうか。

少なくとも私は、職場の仲間と笑い、涙し、すれ違うこともありながら、現在の結びつきを得られたことで、専門家として働けているのだと思っています。

同門や研究会の 仲間の繋がりのありがたさ

専修大学 加藤佑昌

はじめに

今回の特集の中でも「同門や研究会の仲間との繋がりに」の分担をいただき、そもそもどれくらい臨床家がこうした繋がりを持ってているのだろうか……?との疑問が湧きました。

私は博士後期課程まで進んだので、同門、すなわち同じ大学院を修了した仲間や、同じ先生の下で学んだゼミ生との繋がりが、長く続く定期的な研究会の仲間との繋がりを幸いにも持っています。そして、この繋がりが臨床の仕事をする上で重要な位置を占めていることを年々強く感じます。一方で、もっと若い世代の後輩を見てみると、こうした繋がりを持つことにあまり積極的ではない印象

を受けることがあります。

ただ、今回「心理の専門家の繋がりが特集されたこと、何より個人的な経験から、同門や研究会の仲間との繋がりは心理臨床において欠かせない意義があると考えています。

悩みや弱みを 打ち明けられるありがたさ

そもそも心理臨床家の仕事は孤独なことが多いと思います。一人職場はざらですし、心理面接や心理検査は基本的に一人作業です。職場内での他の職種と上手く協働していても、心理臨床特有の仕事上の悩みはなかなか相談できません。同門・研究会の同業の仲間との繋がりのありがたさの一つは、専門的な仕事の悩みを相談できることにあると思います。

特に、一人作業における躓きや失敗感などのネガティブな体験を打ち明けるには勇気がいります。一人作業なのでこっそり隠しておくこともできますが、臨床上の躓きや失敗感などをオープンに検討することで、自分のクセや見落としに気づけて、それが臨床実践の糧となることはよく知られています。

ちなみに、私が学んだゼミでは指導教授から「自分自身の悩みや弱みを打ち明けることは、普段我々がクライエントに求めていること。だから、我々がそれを避けるのは不公平じゃない?」と繰り返され、臨床上のネガティブな体験こそ打ち明けるよう励まされ、打ち明けた時にはその勇気を称えられました。当時は一杯一杯でしたが、臨床の訓練だけで

なく、仲間との信頼を築く基礎も教わっていたんだと思います。

心理臨床の仕事生き抜く支え

私たちは近しい仲間内以外に対しても自分の臨床実践を発表することがあります。相手が見知らぬ人だったり、他の理論を専門とする人だったりすると、どんな反応が返ってくるのかと、緊張や恐れもひとしおになります。そして残念ながら、「あなたも臨床家ですよ?」と思わず疑いたくなるような、手厳しい意見や辛辣なコメントを受け、打ちのめされた経験もあります。

そのような時も、同門や研究会の仲間が支えになります。発表時のディスカッションを仲間内の研究会に

持ち帰ることで、まずは労ってもらえますし、辛辣にしか感じられなかったコメントを冷静に捉え、何かしらの有益な示唆を見出せることも多いです。

個人的にさらにありがたさを感じるのは、研究会の時間で報告するほどではないけれど、職場でモヤモヤしたりイラッとしたりした出来事を、休憩時間などにグチっばく話せることです。

心理臨床に限らず、職場では心ざわつかせられる出来事が程度の差こそあれよく起こると思います。職場内の人間関係が良好でも、その関係には実務的な問題や評価が絡みやすいので、職場で生じたざわつきを職場内で収めにくいことも多々あります。その中において、職場外に同業の仲間がいてグチをこぼせることは、私の場合、地味に大きな支えになっています。そのお陰で、小さなダメージの蓄積にいつの間にか心を蝕まれたり、仕事に自暴自棄になったりせず、心理臨床家としてのメンタルヘルスを保てているように感じています。

「同門の仲間と繋がる場としての『若手の会』」

さて、近年成立した公認心理師資格の法令では、多職種連携やチームアプローチが重視されるようになりました。多職種連携は重要なことですが、駆け出しの若手が多職種との協働を中心業務とすると、心理臨床家としてのアイデンティティに揺らぎが生じやすいようです。一回五分の継続的な心理面接など、いわゆる心理臨床家らしい業務を持ちにくくなっている現在、こうした訴えは益々増えていきそうです。

他の職種との協働が増え、いわゆる心理臨床家らしい業務が減る中で、同じ心理臨床を学び実践する若手臨床家が理論や学派を超えて繋がることは、重要な意義を持つと思います。このような大きなくくりでの同門の仲間との繋がりの場として、日本心理臨床学会「若手の会」があり、また「若手の会」は多様な分野の学会に設置されていて、おおもとは日本学会会議です。各学会の若手の会では、四〇歳頃までを若手と呼ぶこ

とが多く、会員同士の連携と学術振興を目的に活動しているようです。詳細は学会HPをご覧ください。

「時代の変化に応じた心理臨床家のあり方を考える場」

私は若手の会に立ち上げから携わっているのですが、その活動から、最近の若手の多くが臨床業務（ワーク）と私生活（ライフ）の維持に追われ、継続的な研究会に参加する時間やお金、意欲を捻出しにくくなっている様子が見えてきました。その結果、同門・研究会の仲間との繋がりも持ちにくくなっているなら、それは残念なことだと感じます。

この背景にはワーク・ライフの認識の時代的な変化があるのではないかと考えています。従来、専門職種としての働き方（ワーク）と所帯じみた私生活（ライフ）の話はほぼ切り離して論じられてきました。しかし近年、性別に関係なく、誰もが対等に仕事にも家庭にも参加する認識が広まっています。また、長引く不況から、私生活のために臨床の仕事を削って一般のアルバイトをする若手

心理臨床家もいます。このように、「ライフ」抜きには心理臨床家の「ワーク」を語れない時代になってきているのではないのでしょうか。

心理臨床家という職業がこれからは若手が集まり、繋がることには意義があるように思います。仕事と私生活を切り離さず、等身大の悩みやグチ、努力や工夫を気楽に話せる仲間内の雰囲気からこそ、時代に即した心理臨床家のあり方を考えていけるのではないかと考えています。

学生相談領域での 仲間との繋がりがり

こころの専門家としての繋がりがり、なかでも同業者、同領域の仲間との繋がりがりということで、本稿では、私の学生相談領域での繋がりがりについてお話ししたいと思います。

学生相談のカウンセラーは あたたかい

私は常勤の学生相談カウンセラーとなつて二四年が経とうとしています。九州大学大学院博士後期課程を単位満了退学後、研究生を経て九州大学健康科学センターに入職し、それ以来学生相談領域一筋で働いて来ました。

私が入職したての頃は、上司として峰松修先生（九州大学名誉教授）がおられました。先生には一緒に仕事をさせていただく中で多くの実践

の知恵について教えていただきました。三〇歳台で学生相談領域で働き始めた私は、その峰松先生のススメで、全国の学生相談の研修会や団体などの学生相談カウンセラーの集まりやコミュニティに参加するようになりました。

当時の学生相談のコミュニティは、全国的な広がりをもっているのにもかかわらず、お互いの顔が見えるような規模で、毎年開かれる研修会などを通して顔なじみが増え、お互いの置かれた状況や日々の実践の苦労や不安なども気さくに話すことができるようになってきた。とてもあたたかな雰囲気をもつ集まりでした。なりたての学生相談カウンセラーであるにもかかわらず、学生相談界の高名な諸先輩方から気さくにたくさ

ん声をかけてもらったり、気にかけていただいたり、仕事をいただいたりして、そのいただいた仕事を一生懸命こなすことで仲間に入れていただいたり、「ここにいてもいいんだ」という所属感をもてた経験であったように思います。

プロジェクトを通じて 本音を語りあうことができた 繋がりがり

その後、三〇歳台後半は学生相談の出版などのプロジェクトなどに入っていたり、シンポジウムなどのスピーカーのお話をいただいたりするようになりました。私にとつて大きな繋がりがり体験の一つは、アメリカでの一年間の在外研究から帰国して、平成一七年の（独）学生支援機構の「大学における学生相談体制

の整備に資する調査研究」事業において報告書「大学における学生相談体制の充実方策について」をまとめる委員に入れていただいたことでした。福岡から東京に月に何度も出張し、会議後や打ち合わせの際にホテルの一室で、まるで合宿のように、「わが国の学生相談の充実」について、学生相談経験が豊富な先生方と脳をフル回転させつつ「ああでもない、こうでもない」と話しながら、一つひとつの言葉を紡ぎ出す経験は、とても大きな刺激となりました。

もう一つは研究プロジェクトによる繋がりがりがあります。私は、これまでいくつかの学生相談に関する科学研究費の研究代表者・研究分担者になりましたが、これまでの学生相談の繋がりがりできた先生方と近い関係



の中で一緒に研究をさせていたのだことはとても楽しく充実感を得る経験となりました。「学生相談の発展」を研究テーマとし、学生相談の充実イメージ表という新しい評価表を開発したり、Web-baseの評価表を開発したりしたのですが、一定の限られた期間の中で一つのテーマを追いかけつつ、打ち合わせを重ねていく作業は、この分野に何かインパクトを残すぞ、といった一体感が起こって、刺激的な体験でした。

また海外の学会などにも一緒に参加したりもしました。研究や学会でお会いした時には、日頃の学生相談実践の話になったり、それぞれの学生相談への思いや、なぜ自分がここでこの仕事をしているのか、という個人的な話にもなり、ずいぶん話し込みました。その結果、本音が語れる安心した関係となり、仕事やプライベート、思いつきや考えを忌憚なく語ることができるようになっていき、私にとってはとても大切な繋がりと なっています。

本音を熱く語り合う青年期的なところが良さなのかも

このような関係は、業界のネットワーク、仕事上のお付き合い、という言葉はピッタリしません。では一方で、友人なのか、というとその言葉も何かしっくりきません。

実は、学生相談カウンセラーは経



歴や背景、価値観がユニークで多様なので、みんなで同じような発想で同じようなことを考えているわけではなく、それぞれの考え方や目指す方向について葛藤が起ることもままあります。しかし、このような葛藤について本音で熱く語り合えることをよしとする価値観を学生相談カウンセラーは共有しているのではないかと思います。

私は、このような本音を語り合え気持ちをつかちあえるような繋がりになっているのは、学生相談が「高等教育の一環」であり、我々が青年期に寄り添う学生相談カウンセラーだからこそではないかと思っています。そもそも学生相談のフィールドは、学生のアイデンティティができてゆく時のゆらぎや、崩壊と再生に直接寄り添うことが多く、カウンセラーとしての経験が長くなつて中年期になつてもどこか自分の中に青年期の香りを残しているところが

心をフレッシュに保つために

あるように思います。華やかでなく、泥臭く、うまくいかない状況の中でもがきつつ、生活や感情体験を丁寧に聴いて共有していこうとする態度が我々のアイデンティティなので、カウンセラー同士の繋がりにこそその雰囲気であらわれていると感じます。

学生相談は少人数で配置されている職場が多く、一人職場もかなり多い状況です。同業種で心がゆるせる誰かと繋がれることは、自分を保ち、切磋琢磨し成長してゆくのに不可欠だと思います。本稿を読んでいらつしやる「学生相談」領域で働いているみなさん、「学生相談」に関心があるみなさんとも新しく繋がれるといいなと思います。これから初老期を迎える私ですが、このような少し青年期の香りが残った繋がりをまだまだこれから持ち続けられるといいなあ、と願っています。

個人的な生活での支え

みとカウンセリングルームとんぐり 人見健太郎

はじめに

私は心理臨床家となって二五年になりました。今回の原稿を書くにあたり、様々なことがあったことを思い出し振り返りの機会になっていきます。専門家としての訓練や、同僚の支えがあってこそその今日の自分なものは間違いないですが、今回は「個人的な生活での支え」というお題が私に与えられました。

当然のことながら、職業人としての私とプライベートな私は連動しているわけですが、あえてプライベートな部分を書くということは通常のモードではほとんどないことです。その不慣れさゆえに本稿を書くことに戸惑いを覚えるのは職業病でもあ

るかもしれません。五〇歳手前の男性が何を支えに心理臨床家という仕事を続けることができているのか、関心がない読者の方も多いかもしれませんが、思いつくままに書いてみようと思います。

友人

学生時代のことです。私の恩師はよく「専門家との繋がりを大事にするのではなく、業界と関係のない友人を大事にしなさい」と言っていました。若い頃は「そんなこと当たり前じゃないか」と思っていました。友人が、それぞれが家庭を持つたり、仕事で忙しくなってきたりすると、友人と会うことは激減しました。友人との繋がりがいかに大事なのかは、

仕事ばかりになって自分の考えのバランスが偏ってきているように感じたり、ライフサイクルに関連して生じる自分自身の問題を共有したいと思う時、とりわけ強く実感されます。パツと思いつくことは自身や家族に迫る老い입니다。これは同級生と会うとほぼ話題になることです。「体力が落ちたんだよなあ」というボヤキは、「何だ、お前もか」という安心に変わり、「生命保険の見直しとかどうしてる？」などというシビアナ話になったりもします。苦笑いしながら「老けたよな」と話しているとき、次には子育てや親の介護の話に広がっていくことも度々です。アラファイフにとつては健康問題や老後の心配がだんだん現実になってくるようで、あれこれ工夫している

話を聴くのは良い刺激になります。どんな仕事をしても健康が第一ですから、「あ、それいいな」という健康維持の方法や食べ物の話になったりすると、早速自分も試してみたりします。同じような時代を同じように生きたつもりでも、自分の知らないことを友人たちはたくさん知っており、イマドキの何かを自分だけが知らないように感じて焦って調べてみたりもします。どうも、同じであるという安心感と、違うということから生じる刺激が友人との繋がりがから得られるようです。これはどの世代でも同じだろうと思います。が、孤独を癒す最良の薬だと思いません。

心理臨床家の仕事は時に孤独なものです。自分の不安はある程度解決

しておかないと面接室に影響が出てしまいます。専門家としての解決という部分と、プライベートな時間に自然に安心することから出てくる解決は両輪だろうと思います。一方で、「友達がいらない」という切実な悩みに接する時、自分が友人たちから得ている安心感を実感できていると、それを手に入れられずに悩んでいる人たちの苦しさをいつも以上に感じ取ることができません。

専門家として知っている理論以前の感じ取る力をリフレッシュさせるためにも、友人との触れ合いは大事だと思います。しかし、今はコロナ禍という未曾有の時代であり、こうした機会がかなり限られているのは、改めて困った事態だと考えさせられます。

家族

私を支え、私に様々なことを体験させてくれるのは、もちろん家族です。家族は当たり前のことを教えてください。例えば、人間の欲は限りがない側面がありますが、休日にか

族がそろうってテレビの前でのんびりしている時間は、「こういうのが幸せなんだろな」と思わせてくれます。まだ子どもたちは小学生なので、父親である私を自然に求めてくれることも多く、一緒に遊びに行くこともしょっちゅうですが、「そのうち離れていくんだろな」と考えると寂しくもなります。しかし、人間の発達を考えたら、それは望ましいことで、自分自身の頭の知識と感情の不一致に啞然とすることもしばしばです。多くの親がそういうプロセスを経て、子育てから様々なことを学び、そして年齢を重ね、やがて子どもたちが時代の中心になっていくでしょう。

また一方では、私たちの親世代がいてくれる時間のことも考えます。少しずつ私の小さい頃を知っている人たちがいなくなり始めました。親が徐々に弱っていく姿も見えていかなばなりません。そこには様々な感情が渦巻きます。同じ目線で見てくれているのは妻であり、「ちよつとしばらくいね」と話すこともあり、時間は戻らないという少し残酷な現

実の受け入れを家族はそつと促してくれるようです。私の家庭の話でしかなく、決してスタンダードな家族でもないですが、こうやって一緒に時間の流れを感じ取ってくれる存在は他にいません。

愛猫も大事な家族の一員です。子猫だった彼も、人間に換算すると私の年齢をちょっと超えたおじさんになり、ジャンプ力がなくなってきた。「自分もやがて行く道だな」と思うのですが、そんな瞬間に子どもたちが自分に突進してきたりして一転、笑いに変わったりもします。日々の些細な場面に人生の様々なものが圧縮されて起きており、悩みを抱えている人たちに接する私たちは、いかに一人一人の細やかで繊細さを含んだ物語に寄り添えるのだろうかということも考えたりします。

この原稿を書いている今日が私の誕生日という偶然もあって、少し時間の経過ということが強調されすぎており、暗い内容になってしまったかなと反省していますが、家族のためにもまだ元気でないといけないなという思いは強く持っています。

おわりに

自分で望んで就いた職業とはいえず、気持ち折れかかることもあります。が、家族のために頑張ろうという思いは自分を動かしてくれる大きな力であることは間違いありません。

専門家もちっぽけな一人の人間でしかありません。友人であろうと家族であろうと、誰かと繋がっているという安全基地のような部分があることで、日々の仕事に向かえるのだと思います。時々私たちは悩みを自分で解決できるかのように誤解しますが、実際は悩みについて自覚的であるということが大事なのだろうと思います。自分の悩みや体験から得たことの多くを職業人として語ることはあまりないものの、酸いも甘いも自分の中にしつかりインプットして臨床実践にうまく活かしていけると、何かがうまく展開していくのだろうと考えています。

第41回大会について

実行委員会委員長 伊藤良子

はじめに

日本心理臨床学会は、他領域の学会と異なり、具体的な内容を一般の方々に公開しておりません。本学会の年次大会には、会員でない方は、一般公開企画以外参加できません。

なぜなら、本学会の中心となる「事例研究」は、個人の心に深く関わる心理臨床によって、相談に来られる方々に寄与するためになされるものであり、個人情報秘密を守ることが大切にされているからです。

他方、本誌『心理臨床の広場』は、会員のみならず、大学生や高校生を含む一般の方にもお読み頂くように刊行されている雑誌です。将来を担われる若い方々に、本学会において

行われている心理臨床や研究内容について、是非知って頂きたい、そのような思いも込めて今年度の第41回大会に予定されている現時点の企画について紹介させて頂きます。

第41回大会に向けて

第41回大会は「心理臨床の未来と心理臨床学会」のテーマの下、対面大会を二〇二二年一〇月一日（土）～二日（日）に神戸国際コンベンションセンターにおいて、また、それに先立ってWeb大会を二〇二二年九月二日（金）～五日（日）に開催いたします。本学会は一九八二年に事例研究を重視する学会として発足し、四〇年を経ました。会員数は約三万人に増え、心理臨床と心理臨床学は大きく

発展しましたが、人間が抱える困難な状況はさらに多様化・複雑化・深刻化し、社会に対する本学会の責務は一層大きなものになりました。

このような本学会の大会開催は、従来は大学が担当校となつて会場も担ってくださっておりました。学会員の増加には、大規模会議場の使用等により乗り越えてきましたが、この二年間は新型コロナウイルス拡大により、Web開催が実施されました。

今年の第41回大会はこうした経験を踏まえ、新たな第一歩として、「心理臨床の未来」に向けて、理事会主催により、対面大会とWeb大会を開催することになりました。

なお、これに先立った39回・40回大会は、新型コロナウイルスの影響により対面大会は中止され、本学会発足当初から最も重視されてきた「事例研究」は、感染予防のために発表数の制限等、慎重に準備してきたにもかかわらず、誠に残念なことに、開催を断念しました。Web開催では、クライアントの個人情報をも十分に守れないことが危惧されたか

らでした。

この間、我々人間は、新型コロナウイルスによる突然ともいえる多くの死に遭遇し、地球上の様々な生命体とともに生きる意味を改めて考える時を与えられました。第41回大会では、このような生死を抱えた人間の原点に立ち、未来に向けて、「人間の心」と「心理臨床のあり方」について、多様な観点から考えたいと思っております。

第41回大会の企画内容

今大会は、第40回に引き続き、対面大会とWeb大会を開催する準備をしております。日程的には、Web大会が九月、対面大会が一〇月に開催されます。以下に、対面大会、Web大会の順で内容をご紹介します。ただし、対面大会は、新型コロナウイルスの状況によっては中止になる場合もありますので、ご了承ください。

1. 対面大会：二〇二二年一〇月一日（土）・二日（日）（於：神戸国際コ

ンベンションセンター)

①大会の中心は会員による「事例研究」「臨床教育」発表です。この発表には指定討論者からのコメントによる討論がなされ、その後、会場参加者との議論が行われます。通常は、希望者は基本的に発表可能ですが、今回は密を避けるために発表者数・参加人数を制限して行います。

②人間の「生」について、また、今日の世界的な課題について、特別講演やシンポジウムを以下のように企画しています。

●特別講演「命あるかぎり」松本サリン事件を超えて」講演者：河野義行氏

●国際学会日本人役員によるシンポジウム「国際社会が直面している課題」シンポジスト：国際ユング心理学会（河合俊雄会長）・米国内心理学会（葛西真記子委員）・日韓両国の若い精神科医のための合同研修会（奇恵英コンサルタント）・国際森田療法学会（黒木俊秀委員）・国際自己心理学会（富樫公一評議員）・国際箱庭療法学

会（名取琢自会長）、司会者：日本心理臨床学会（藤原勝紀理事長）

③三団体合同委員会の学校臨床心理士ワーキンググループ企画シンポジウム スクールカウンセリングのさらなる充実を目指す企画

2. Web大会：二〇二二年九月二日～五日（インターネット上の特設サイト）

①会員による理論・調査研究（口頭発表およびポスター発表）。この発表では事例は取り上げません。

②他領域の専門家による人間の深い次元についての講演

●特別講演「生きものの語る物語から人間を考える」講演者：中村桂子氏（生命誌の視点から）

●特別講演「自閉スペクトラム症の子どもや成人への心理療法的アプローチ」講演者：青木省三氏（精神科医の観点から）

③欧州と米国の今日的課題についての「事例」を踏まえた講演

●海外招待講演「青年期・ジェンダー・アイデンティティ」（仮題）

講演者：Stefano Carta, Prof.（イタリア在住・ユング派分析家・カリアリ大学）、指定討論者：大山泰宏氏

●海外招待講演「性的同意のグレーゾーン」誘惑なのか？ 強要なのか？ 講演者：Susan Kolod, Ph.D.（アメリカ在住・国際精神分析協会評議員）、通訳：梶山彩子氏、指定討論者：村本邦子氏・ガヴァニオ重利子氏

④非会員に対する一般公開動画

●高校生対象の企画：大学進学に向けて高校生が知りたい内容を提供

●大学生対象の企画：大学院進学に向けて大学生が知りたい内容を提供

●大学院生や修士生対象の企画：非会員大学院生等に本学会に入会し研鑽を積むことの意義を伝えるための情報提供

⑤学会の各委員会による企画シンポジウム

学会誌編集委員会・広報委員会・職能委員会・教育／研修委員会・カリキュラム委員会・国際交流委員会・研究推進事業委員会・支援活動委員

会・資格関連委員会・自殺対策専門部会・倫理・職能・教育・研修委員会合同・若手の会（対面も実施）

⑥三団体合同委員会の子育て支援合同委員会企画シンポジウム

⑦受賞者講演：学会賞一本・奨励賞三本

⑧会員企画シンポジウム：大会テーマについて会員による企画から審査で選択された四本
その他：会員集会、会員による自主シンポジウム（多数）

おわりに

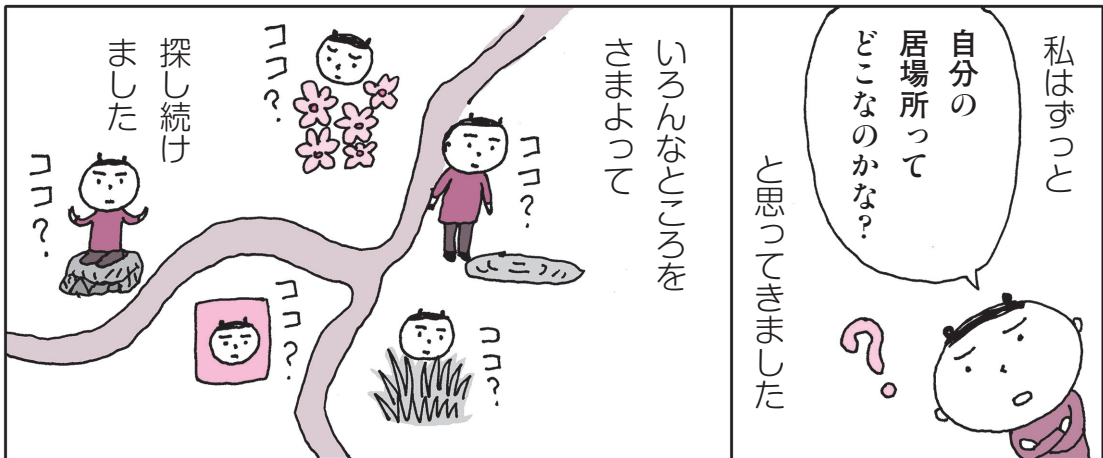
第41回大会は「心理臨床の未来と心理臨床学会」のテーマで開催されます。未来についての熟考は、新たに人間と深く向き合うことこそが求められます。本大会が、人間の在り方についてさらに探究する場となり、国民に寄与できますよう願っております。

皆様のご参加をお待ちしております。

てんてん ココロの広場に行く

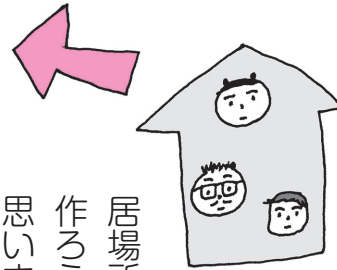


ほそかわ てん てん
細川 貂 々



細川貂々(ほそかわ・てんてん) 1969年生まれ。セツ・モードセミナー卒業後、漫画家、イラストレーターとして活動。「ツレがうつになりまして。」が大ベストセラーに。「それでも母が大好きです」、「わたしの主人公はわたし」、「日帰り旅行は電車に乗って 関西編」、「生きづらいでしたか?」など著書多数。

その次に
家の外にも



居場所を
作ろうと
思いました

どうやって
作ろうかな

いろいろ考えて
当事者研究会を
やるつもりでした

どんな人でも
気軽に来られる
場所がいい

図書館なら
ぴったり!!

と思ったので館長さんに
相談したところ

図書館こそ
そういうことを
やる場だと
思います

ヤッター



というわけで私の
二番目の居場所は
図書館で月に一度
行われてる当事者研究会
「生きるのへた会？」に
なりました



「ココでみなさんと
生きづらさをわかち
あえて楽しいです

生きるの
へたな
細川です

当事者に役立つ

心理教育

繋がりが 失われたと 思うときに

誰かがいつもそばにいて助け支えてくれていればいいのですが、人生にはそんな人がいないときもままあるものです。生活環境が変わって身近に親しい人ができないことがあります。それまではまわりにあった繋がりが失われ、ふと気づくと孤立している、そんな瞬間が訪れることがあります。

人との繋がりが失われると、つらく寂しく、あたかも自分自身が失われたかのように感じたり、孤独感にさいなまれたりするかもしれません。心が傷つき蝕まれていくこともあります。でも、本当にすべての繋がりが失われたのでしょうか。もう新たな繋がりは生まれませんか。繋が

りの中でしか生きられないでしょうか。視点を変えれば別の景色が見えます。別の景色の中では、別の繋がりが見えてくるかもしれません。別の自分が見つかるかもしれません。今しばらくやり過ごせばいいとか、新しい繋がりを作ろうと思えばいいとか、このコーナーでは、人生の様々なステージで繋がりが失

われたと思うときに視点を変えるヒントを、カウンセラーたちからお送りします。繋がりが失われたと思うとき、誰もが人生のどこかできつと顔を合わせる孤独と、どう付き合っていくかを考えるチャンスになることを願っています。

立教大学

山中淑江

「みんなと一緒に」の不自由と「一人になること」の自由と

愛知教育大学教育科学系心理講座

樋口亜瑞佐

孤立している子を遠目に見ている子の子

「声をかけてあげようかなって思うけど……でもやっぱ関わらないようにしちゃうって」とある子は言いました。「わたしもそうかも……」可哀想とは思うけど何も出来ないかある高校生らがSNSでのトラブルがもとで不登校になってしまった他クラスの子について話をしていたときの一コマです。これまで児童福祉から大学附属校のスクールカウンセラーでもある私は、たくさん人の人の「いじめ観」を聴く機会があります。以前から言い継がれていることですが、どのような理由であれ、いじめは許される行為ではなく、誰かをいじめてもいい権利など誰も持ちえません。ですが、誰かをいじめることでしか表せない、複雑な葛藤や言葉にならない想いを抱えている人と

いうのがいます。許されざるいじめという行為の奥に、必ずなんらかの理由があるのかもしれない。無意味ないじめはない、しかしいじめは絶対に許されない、のです。

これを読んでる人の中にも、まさに今現在いじめ問題に悩む人、孤立感を感じている人がいるかもしれない。でも前述した高校生たちの話からも分かるように、「当事者に対して声をかけるなどの援助行為をしないといけないと分かっているにもかかわらず」と申し訳なさを感じる子が一定数、あなたの周りにも必ずいることを知っておいて下さい。

あなたから周りの子たちが離れて行ってしまい孤立したとしても、真に一人なのではありません。

一人になることで見えるもの

自分から一人になると、一人にさせられるというのは、一人であることに変わりはないものの、その本

質と実感は全く違います。孤立しているのではなく、一人になってみるという意識になるのも一つです。

今まで読もう・観ようと思っていた本や動画、行こうと思いつつ行けていなかった場所、話してみようと思っていて話すきつかけがつかめなかった誰か、そうした様々なジャンルのそのままになっていたことにアクセスしてみるというのも、一人になるとむしろやりやすいことかもしれません。人生史上最高の一冊や、推しのアイドルが見つかるかもしれないし、思いもよらない風景に出会うかもしれません。今までのグループにいたら絶対に感じなかった気持ちに触れるような会話が新たな誰かと生まれるかもしれませんし、一人を楽しむあなたを見ている誰かはあなたを強烈に羨ましく思うかもしれません。

忘れてはいけないのは、ずっと孤立したまま、ずっと置かれた環境の

ままなんてことは絶対にないということです。それはあなたの内面は確実に変化していくということ、周りの人たちが違って時間とともに感じ方や考え方が変化し、職場なら離退職や新規採用者の受け入れ、学校なら進級や卒業にクラス替えといった、多くのメンバー構成の変化が訪れるからです。

もし「あ、自分はいじめられてるかも」と感じるものがあつたら、その相手に対して「何か悩みがあるんだな、大変だな」と想ってみて下さい。そのときにはすでにあなたは相手に孤立させられているのではなく、不憫な相手から距離を置いて、少し自由になっているのではないでしょう。

近くて遠い親と

沖縄県スクールカウンセラー 国生まゆみ

親との距離

私立の中高一貫校や県立高校でS
C（スクールカウンセラー）をして
いるので、中学から高校まで六年間
に及ぶ思春期の変化や成長を見るこ
とができます。以前、勤務先の学校
で中一生と高三生に「親に言いたい
こと」についてアンケートをとった
のですが、親に対する距離の違いが
如実に表れていました。中学生は

「勉強、勉強ってうるさい！」に始
まり「お小遣い増やして」「スマホ
返して」から「同じことを何度も言
わんで」「言われなくてもわかって
る！」「子どもだけ子どもじゃな
い！」等々、親の手を振り払い一人
歩きを始める思春期前期のエネルギ
ーが全開という感じです。

一方、高校生は「学校と塾の往復。
家では寝るだけで親との会話がほと
んどない」「家と学校が同じ場所にな
ってしまふのは辛い。家では安ら
ぎたい」「学費を沢山使わせたのに

普通の大学では申し訳ない」「子ど
ものために生きるのではなく自分の
生活を楽しんでほしい」等、親の苦
労を思いやれる程大人になっている
せいも、中学生の屈託のなさに比べ
るとやや鬩（か）りを帯びていて、親の庇
護から離れ自立へと向かう時期の孤
独感も垣間見えます。

気持ちを伝える

「〇〇学部に行きたいと親に言う
と将来仕事ないよって切り捨てられ
た」「〇〇大学以外認めないと言わ
れた」「大学に行く意味がわからな
いと言うとじゃあ（学校や塾に）送
り迎えしなくていいねって」……進
路に悩む高校生から、子どもの思い
を理解せず一方的に自分の価値観を
押しつける親のことが語られますが、
親密な関係ゆえのミスコミュニケーション
ションが実は非常に多いのです。
「進路が合わなかったらどうしよ
う」「一生が決まってしまうのか」

「自分が本当は何をしたいのかわか
らない」……進路決定を前に色々な
気持ちが入り交錯し揺れるのは自然なこ
とです。でも気持ちというものは言
葉にして伝えなければ誰にもわかり
ません。保護者からはよく「子ども
が何も話してくれない」「何を考え
ているのかわからない」という言葉
を聞きます。子どもの気持ちがあつ
かぬまま、自分は適切な寄り添い
方ができているのかと、親も内心は
不安で一杯なのです。子どもには
「言ってもどうせわかかってもらえな
い」という諦めの一方「親なら言わ
なくても察してほしい」という期待
や甘えがありそうですが、切羽詰ま
った時に感情的に話しても伝わるど
ころか逆効果です。

「Iメッセージ」というコミュニ
ケーション法があります。「（私は）
〜と思う・〜したい」「（あなたは）
〜すると（私は）嬉しい・悲しい」
等、自分を主語にして考えや気持ち

を伝える言い方です。相手を尊重し
つつ自己主張できるので、自他の境
界が引きにくい親子の会話の中で意
識して使ってみることをお勧めしま
す。「どうしていいのかわからなく
て困っている。助けてほしい！」も
Iメッセージの基本です。

程よい距離の他者

多くの高校生にとって、親とは一
番近くにいながら時に一番遠くに感
じる他者であり、どう適切な距離を
置くかは自立にとって重要な課題と
言えます。進路について親と話す前
に、程よい距離の置ける信頼できる
大人——親戚・学校や塾の先生・S
C——に自分の思いを聞いてもらい
整理するのもいいでしょう。「親に
自分の気持ちを伝える練習をした
い」と来談してみませんか？「た
だ誰かに聞いてほしい」でも構いま
せん。カウンセラー室で待っていま
す。

つながりは多いほど幸せなのか

広島修道大学学生相談室

大島啓利

大学のキャンパスは若者があふれ、活気に満ちて、楽しそうに交流しているように見えるかもしれませんが。人が集まるところで起きることはキャンパスでも同様に起きています。人とのつながりのあり様は多種多様で、キャンパスも例外ではありません。ここでは学生と話していて感じたことを書いてみます。

【適量】のつながり

コロナウイルス感染症対策によって、人とのつながりにかかわる状況は大きな影響を受けました。やりたいたがでできなくなり、会いたい人に会えなくなった人もいます。逆に、やりたくないことをしなくて良くなり、会いたくない人に会わなくて済むようになった人もいます。多くの方はその両方を体験したことでしょう。

新しい出会いを求めていた人はその機会が極端に少なくなったと感じたことでしょう。人とのかかわりが制限されたことで、これまで無理をして付き合っていたことに気づいた人もいます。アクティブラーニングなどでたくさん人とかわるよう煽られていた状況から解放され、オンラインの生活に安堵した学生もいます。人によってつながりの「適量」が異なることを改めて見せてくれた気がします。

【友達はつくりません】

キャンパスは自由度が高く、そこでは多様な人との交流を忙しくこなす生活もできますし、人とほとんどかわりを持たない生活をしようと思えばできます。

ある学生がいました。大学の雰囲気は「ここでは友達はずりません」と宣言し、その通りの生活を貫いて卒業しました。彼は、大学生だからといってキャンパスが生活の中心である必要はないということを実証しました。人はとやかく言うかもしれませんが、そういう生活も選択してよいのです。

【つながり少な目をお願いします】

つながりの適量が少ない人も、ごはんの少な目を頼むときのように、引け目を感じず「今の自分には少な目が合っている」と思えるといいですね。コロナ前と比べるとほんの少

しだけ「少な目がいいです」と言いやすくなったかもしれません。そうそう、人とのつながりを広くたくさん持ちたい人も思うように行動してくださいね。

人とのつながりで悩んだら

適量の多少にかかわらず、人とのつながりで悩むときがあります。相手がいることなので自分の思うようにはいきません。相手をコントロールしようとしないうちに気をつけましょう。それはできないことだし、できたとしてもしてはいけないことですよね。

自分だけでできることとして、自分のコミュニケーションを見直してみることがあります。自分の気持ちをつかめているか、分かりやすく伝えられているか。ささやかですが、大切なことです。難しい交渉とかは、その後でいいでしょう。



EQRoy/Shutterstock.com

子育てには「終わり」があると知っておこう——子育てがづらいと感じる人へ

甲南大学 高石恭子

子育て中の親は現代社会のマイノリティ

不況や大規模災害などによって社会が不安に晒されると、弱い立場の少数派の人々に怒りの矛先が向けられ、排除の対象になりやすいことは歴史的に証明されているとおりです。二〇二〇年初頭からわが国を襲った新型コロナウイルス感染症のパンデミック（コロナ禍）も同様に、さまざまな差別や偏見を生み出し、人間の心の弱さやもろさを露呈しました。

核家族化や少子化が進む現在の日本では、乳幼児を育てる親もまた社会のマイノリティです。緊急事態宣言下の「Stay Home」と政府が広報したときも、幼子を抱える母親（とくに父親）が遭遇するつらさには想像が及んでいなかったのではないでしょうか。

ひとり親だったり、パートナーがいても自宅にこもってリモートワークしていたりすると、生活必需品を

買いに行くにも乳幼児を連れて外出せざるを得ません。たまには子どもをのびのび遊ばせたいと思って近くの公園へ行くと、遊具は使用禁止でロープが張られ、通りかかった人に冷たいまなざしを向けられます。やり場のないイライラをわが子にぶつけてしまい、さらに罪悪感にさいなまれた若い人は少なくなかったはず

なかなか表明できない子育ての「負（マイナス）」の感情

コロナ禍でDVや児童虐待が増える恐れを法律家や心理臨床家は早くに指摘していましたが、二〇二〇年度の「児童相談所での児童虐待相談対応件数」などのデータを見る限り、顕著な増加現象は表れていません。一方で「虐待相談の内容別件数の推移」を見ると、二〇二〇年度は「心理的虐待」の割合が過去最多であることがわかります。つまり、親子の

目に見えない関係性の中で、不安や不満、怒りなどの負の感情が増幅されている可能性が考えられるのです。わが国では、母親になった女性には子育てを楽しむ、子どものためには喜んで全力を尽くすものだという幻想が社会に根強く存在しています。そのような世間のまなざしゆえに、とりわけ女性は、子育てに対する否定的な思いを表現することが難しく、自覚さえしにくくなっているのではないでしょう。抑圧された感情は思いがけず暴発したり、病の症状になったり、自分を苦しめたりします。

子育ての「常識」から自由になる

日本文化の根強い母性幻想にコロナ禍が加わり、今、子育てにはかつてない不安な状況が生まれています。親子で過ごす時間が増えている一方で、活動制限が長期化し、祖父母や友人家族との交流もままならず、子どもの発達にどのような影響が及ぶ

のかは未知です。また、わが子のワークチン接種をどうするのか、決断の責任を自分は負えるのか、子どもが幼いほどその重圧は高まります。

そんな中で、子育てのつらさに圧倒されそうになっているなら、ぜひ世の中にまん延する常識から自由になり、子育ては自分一人で行うものではないこと、子どもはいつか巣立ち、その営みには「終わりがある」ことを思い出してください。「終わりがある」と考えることで、私たちは目標（ゴール）を定め、そこに向かって歩んでいくことができます。子育ては有限の時間の営みです。だからこそ、喜びもつらさも含めた無限の学びの可能性を秘めた経験にもなるのです。

●参考文献

高石恭子（二〇二二）『子育ての常識から自由になるレッスン——おかあさんのミカタ』世界思想社

子どもの思い

最近、後輩の若い女性が結婚しました。引っ越しの日、夫となる人のお母さんが新居の掃除を手伝ってくれました。優しい姑の心配りに感謝しながら、掃除を終えて、見送りに玄関に来て、彼女は愕然としました。一見して高額と分かる玄関マットが敷かれていたからです。

姑が好きな薔薇の花柄は、モノトーンで揃えたインテリアの中で華やかに浮き上がっていました。

何も言えずにいる彼女に気づいた彼が、とりなす口調でお礼を言っているのを、遠い現実のように聴いていたそうです。

もうひとりの知人、三〇代になっただばかりの若い専門職の女性は毎年春が来ると憂うつです。北海道に住む母親から大量のアスパラガスが送られてくるのです。大学入学で故郷を離れた年から続く定期便です。

職業人として多忙な今、帰宅して

寝るだけの日々に、大量のアスパラガスは手に余ります。母親は「ご近所に差し上げて」と言いますが、彼女のマンションに住むのはみな彼女と同じ多忙な職業人ばかりですし、そもそもあいさつ程度のつきあいでも、親しく話したことはありません。

次第にしながらいくアスパラガスに、彼女の気持ちも滅入っていきまします。そして、食べられそうにない状態になって、ごみ袋で出すころには、決まって父親から電話があります。父親はアスパラガスのことは何も言いませんが、彼女は、すぐにお礼の電話をしなかった言い訳を繰り返すことになりました。

素直にお礼を言えない自分に嫌気が差し、嫌気が差している自分にさらに嫌気が差して、最近ではアスパラガスを見ただけで、吐き気がするようになったと言います。アスパラガスに罪悪感の記憶が結びついて、フラッシュバックが起きているので

しょう。

家族愛への幻想から自由になろう

私も、子を持つ母親です。高価な玄関マットを奮発した姑の気持ちも、新鮮なふるさとの味を送りたい母親の気持ちもよく分かるつもりです。わが子が一人暮らしを始めたときには、

車で別れて、ホームへの階段を上りながら、ポロポロと落ちてくる涙をどうにもできませんでした。今でも、子どもへ荷物を送るときには、あれもこれもと詰め込みたくなりま

す。だからこそ強く思うのです。子どもの成長に合わせて、親も成長していかなくてはと。

成長とは、一人でいられるようになることです。お腹の中にいて、母親に命のすべてを預けていたわが子は、生まれ落ちてもお、母親に全存在を依存しています。そこから徐々に自立し、一人の人間として歩

み始め、親から離れていきます。

お互いに独立した人格として、適度な距離を保ちつつ、思いやりを持ち続けること。家族愛はしばしば「私の愛があの子には必要」「私の愛は間違っていない」という確信に似た幻想を含みます。それがしばしばトラブルを生じさせます。

「愛」だと自分が思っているものは、もしかしたらわが子にとっては負担かもしれない。そんな自身への冷静な距離を保つことが、大人になったわが子と良い関係を維持するコツなのかもしれません。難しいことですが。

定年退職

徳島文理大学 渡邊 悟

定年退職の現在

私は、三〇数年間、少年鑑別所や刑務所などの矯正施設で心理職として勤務した後、三年前に定年退職し、現在は、大学の教員として教鞭をとっています。私が就職した頃は、定年退職と言えば、現役を引退して隠居するというイメージがありました。が、今や少子高齢化を背景に、定年退職後も仕事を続けるライフスタイルが定番になっています。

特に、令和三年四月には改正高齢者雇用安定法が施行され、高齢者がますます労働力として期待されるようになり、まさにプロダクティブ・エイジングを求められる時代を迎えています。このように定年退職後の生き方が様変わりするにつれ、以前のように定年退職に伴って社会との繋がりが薄れ、寄る辺なきにとられるということは少なくなっているかもしれません。

私の定年退職

とはいえ、定年退職後に現役を引退するにしても再雇用や再就職をするにしても、新しい環境に身を置くわけですから、慣れ親しんだ人たちとの繋がりを失う喪失感、新しい繋がりができるまでの孤独や寂しさを感じることはあると思います。

実際、私も矯正施設という「塀の中の世界」から「象牙の塔」と称される大学に身を転じてカルチャー・ショックを受け、新たな職場で疎外感や孤立感を味わいました。しかも、そこにコロナ禍が追い打ちをかけ、何回かは旧知の人たちとオンライン飲み会を開きましたが、それまでなら直接杯を交わして愚痴を言い、憂さを晴らしていたのにそれができず、ストレスが溜まったことは確かです。しかし、今から振り返ると、私の場合は、救いだったことが二つあります。一つは、大学の授業で「老年心理学」を担当したことです。この



授業の準備を通じて、加齢に伴う身体面・認知面・精神面の定型的な変化を知り、自分の現在地を客観視することができました。もう一つは、学生相談や臨床心理相談室の相談活動に携わる中で、人との繋がりをうまく持てず、生きづらさを感じている人たちの不安や孤独に触れたこと

です。それにより、孤独なのは自分だけじゃないとか、自分の孤独など取るに足らないちっぽけなものだと相対化して見ることができ、定年退職後の沈んだ気分が少し軽くなり、新たな繋がりが作りに前向きになれたような気がします。

これから定年退職を迎える方へ

個人的な体験をつらつらと書きましたので、これから定年退職を迎える方の参考にはあまりならないと思いますが、定年退職後の生活にとって健康が第一であることは言うまでもありません。その上で、忍び寄る老いと向き合い、まだできるという自信と、もうここまでという諦めのバランスをとりながら、自分の現状を受け入れることができれば、新たな繋がりが作りに向けた一歩を踏み出すことができるのではないかと思います。

つながりが失われた時 高齢者

社会医療法人ベガサス馬場記念病院 梨谷竜也

高齢者における喪失

独居高齢者や孤独死が増えているといった報道が近年多くなってきました。では、高齢者は孤独を感じやすいのかというと、他の年代と比較して特に孤独を感じている人が多いいわけではないことがわかっていきます。

多いわけではないですが、他の年代同様に高齢者も一定の割合で孤独



を感じている人がいます。高齢者の場合、喪失がひとつのキーワードになります。一般に高齢者は「経済的基盤」「心身の健康」「社会的つながり」「生きる目的」の喪失を経験しやすいと言われています。この中で直接的には、社会的つながりの喪失が孤独感に直結しやすいと言えます。仕事からのリタイア、子どもや孫の独立、友人、兄弟、配偶者らの死別、自身の病気や障害による入院や施設入所などが、高齢者に特有の社会的つながりの喪失と言えます。

孤独を感じないために

心身の健康を維持し、なるべく長く仕事を続けられるようにすれば（経済的に続けざるをえないということもありますが）、孤独をあまり感じずに済むかもしれません。それが難しい場合でも、ボランティアや地域活動などの社会貢献活動や、趣味の集まりなどに積極的に参加する

ことは孤独感を和らげるのに役立つでしょう。今さら新しいことをするのは抵抗があるという方もおられると思いますが、仕事でないのであれば、すぐにやめてもいいわけですから、まずは体験してみてもいいでしょうか。

高齢期は身体的な衰えにより、外出が難しくなり、それにより孤独を感じるという方もおられます。しかし、今やインターネットのおかげで世界中の誰とでもつながりを持つことが可能です。インターネットは若い人のものだと思うかもしれませんが、じつとしたままでも人と交流できるツールですので、むしろ身体の不自由な人こそ役立つツールではないかと思えます。

孤独とともに

ところで、ここまでどうやって人とつながるかを述べてきましたが、人とならぬかというものは、そんなに

当たり前のことなのでしょう。 「人間は元来一人で生まれて一人で死んで行くのである。大勢の中に混じってゐたからって孤独になるのは、わかりきったことだ」とは明治から昭和にかけて活躍した小説家、田山花袋の言葉です。孤独はいずれ誰にでもおとずれる人の宿命であり真理とも言えます。そうであるならば、孤独を恐れず、むしろ孤独ならではの楽しみ方や気楽さを味わってみるという考え方もあっていいのではないのでしょうか。

「孤独は嫌だ」「私をこんなに孤独にさせる周囲の人間はなんて冷たいんだ」と思い始めると、かえって人が寄りつかず、孤独を深める結果になるかもしれません。孤独を楽しめるくらいの余裕があったほうが、人間関係でしんどい思いをせずに済み、ほんのちよつとした人とのつながりに幸せを感じられるようになるのではないかと私は考えます。

開始後すぐに、講師から、黒澤明監督の『夢 (Dreams)』の中の『日照り雨』を観てから議論をしましょうと言われました。この空間の中で日本語を聞き取れるのは私だけなのだといった妙な高揚感を味わいながら、その内容に魅了されました。この映画は「狐の嫁入り」について描かれています。私は、隣に座っているスクールカウンセラーをしているというイギリス人に「これはエディプス状況で、狐の嫁入りは原光景を連想させ、短刀は去勢を示唆しているように思う」と、単語を繋げただけの拙い英語で

伝えました。彼は「それを皆に伝えてくれ」と言うものの、まだうまく英語が話せない私は必死に抵抗し、彼が代弁してくれました。そして、講師から「あなたは日本人？ 日本文化というのはとても興味深いわね。foxにもきっと色々な連想が含まれてるんでしょうね」と言われました。ここからフロイトの「夢の作業」について解説がなされました。拙著、藤森 (2016) に分かりやすくまとめているので、ぜひご一読ください。

臨床素材を検討するディスカッションセミナー

後半のディスカッションセミナーでは、10人程度の小グループに分かれ、セミナーリーダーとともに、受講生が提示する事例を検討しました。私のグループは、受講生の多数が英国で働いている精神科医か心理職であり、病院やクリ

ニックで診ているクライアントの事例を発表していました。私は、すでに日本で終えていた乳児観察の素材を提示しました。ここでも「日本の文化」について考えるきっかけを与えられたように感じました。

おわりに——日常の中の精神分析

現在、私は、訓練の一環として自分自身が精神分析を受ける個人分析を週4回受けています。挿絵のようにカウチに横たわり、自分自身の人生を分析家と話すことによって、今まで気づいていなかった気持ちに触れて、驚きであったり、喜びであったり、時に痛みであったり、様々な感情が自分の中に存在し、いかに自分が自分というパーソナリティを築いてきたかが徐々に明らかになってくる感覚があります。これは、日常の中での自分自身との対話のように感じています。

この The Foundation Course は、精神分析についてもっと知りたい、深めたい、けれど、少し二の足を踏んでいる人にピッタリの初期研修の場であると思います。そこから、様々な道が広がっていくように思います。またの機会にロンドンでの日常の中にある精神分析体験も日本の皆さんにお伝えできたらと思います。

●参考文献

藤森旭人 (2016) 『小説・漫画・映画・音楽から学ぶ 児童・青年期のこころの理解：精神力動的な視点から』ミネルヴァ書房



WORLD MAP

ロンドンでの精神分析体験

Institute of Psychoanalysis の The Foundation Course での研修から

The Tavistock and Portman NHS Foundation Trust 藤森旭人

はじめに——ロンドンと精神分析

ロンドンは、精神分析がとても発展している都市です。私は現在、子どもの精神分析的心理療法士になるために、The Tavistock and Portman NHS Foundation Trust（通称：タビストッククリニック）で、訓練を受けています。精神分析を簡潔に語るのは非常に難しいのですが、セラピストとクライアントとの対話を通じて、クライアントのころ、特に深層心理や無意識と呼ばれる部分も含めたころの理解を試みる営み

であるとは言えそうです。それが、場所（病院・学校・福祉施設等）や対象（子ども・大人）、障害・症状・困り事の違によって、治療的になったり、成長促進的になったりと、形を変えます。私は最初に、その精神分析の理論と実践方法を学びに精神分析家を養成しているロンドンのInstitute of Psychoanalysisへと向かいました。

Institute of Psychoanalysis の The Foundation Course での研修

2019年9月から2020年7月までの間、Institute of Psychoanalysisが提供するThe Foundation Courseの研修に参加しました。学費は約20万円程度ですが、心理臨床学会の海外研修参加助成制度（10万円）を利用しました。この研修は、週1回計31回、夜間の2時間半、前半の精神分析に関するレクチャーと、後半の各自の臨床実践を持ち寄って議論するディスカッションセミナーから成り立っていました。ちなみに、このコースを受講した後、タビストッククリニックに所属することを想定していたので、研修のない日は語学学校に通い、必死に英語を勉強していました。

研修日の前半は、各ベテランの精神分析家に

よる週ごとに異なるテーマでの講義であり、受講生は50人程度いましたが、日本人は私一人でした。テーマは「精神分析と乳幼児発達」「精神分析と調査研究」「周産期および産後における脳の可塑性」「自殺と自傷」「夢」「ヒステリー」「喪とメランコリー」「間主観性のルーツ」「ボーダーライン心性」「病的同一化」「心身症」等がありました。これらの中には最先端の発達研究や脳科学の知見も含まれていたため、科学的根拠に基づいた心理療法の提供に寄与する情報も得ることができました。興味深かったレクチャーを、エピソード的に紹介したいと思います。

精神分析と夢と日本文化

レクチャー会場の Sigmund Freud Lecture theatre に着くと、スクリーンに『こんな夢を見た Once I had a dream』という日本語と英語が映し出され

ていました。ロンドンで日本にまつわる何かが行われると思うと、とてもワクワクしてきました。

放送大学

(臨床心理士・公認心理師)

放送大学教授・臨床心理学プログラム 大山泰宏

放送大学教授・公認心理師教育推進室長 桑原知子

放送大学といえば、テレビやラジオを通して授業を配信しているだけの大学というイメージをもつ方も多いかもしれませんが。そんな大学で心理臨床家を養成できるかと不思議に思われることでしょう。実は放送大学は、多くの年齢層と全国に開かれた通信制の大学としてのメリットを活かして、心の専門家の養成をおこなっているのです。

臨床心理士

1. 放送大学における臨床心理士

養成概要

放送大学には文化科学研究科という大学院があり、その中の「臨床心

理学プログラム」で、臨床心理士養成がおこなわれています。臨床心理学プログラムは、公益財団法人日本臨床心理士資格認定協会により二種指定の養成校として認定されています。学生が全国に散らばっている中で、臨床のトレーニングの場としての心理教育相談室を備えていないためです。学生は大学院修了後、合計一年の臨床心理の現場での実践を積んで、臨床心理士受験資格を得ることができます。

臨床心理学プログラムで学ぶ学生は、年齢も二〇代から七〇代までと幅広く、またそのキャリアも様々ですが、既に教育や医療などの対人支援の現場で働いている方が、さらな

るスキルアップと臨床心理士資格取得を目指して入学してくるケースが多いのが特徴です。

臨床心理学プログラムは、大学院文化科学研究科がスタートした二〇〇二年から学生を受け入れています。当時の入試の競争倍率は約五四倍。通信教育・生涯教育機関で、臨床心理士養成がスタートすることを、いかに多くの人が待ち望んでいたかを示すものです。現在の競争倍率は一〇倍程度ですが、それでも難関であるのは変わりありません。

2. 臨床心理士養成の特徴

では、通信教育機関でどのように心理臨床家の養成をおこなうのか。

臨床心理士になるためには、演習や実習を通じた学びは欠かせません。対面の場実際に身を置くことを通じてこそ学んでいける技能や態度があります。臨床心理学プログラムでは、修士一年次に、約一週間連続の「面接授業」が三回、二年次に三日連続のものが一回あります。面接授業とは、いわゆるスクリーングで、放送大学の千葉・幕張本部にある宿泊施設に泊まり込みで、みっちり心理面接の基礎、心理査定の方法、事例検討会などを体験します。加えて二年次には、学生の居住地近くの精神科医療施設や教育施設等で、合計九〇時間の臨床心理実習（現場実習）を体験します。これらはいずれも大変密度が濃いもので、ふだんはテレビやラジオなどの放送授業を通して学んでいる学生は、このときとばかり、みるみるうちに多くのことを吸収し、主観的な印象ではありませんが、その成長にはめざましいものがあります。

臨床心理士養成カリキュラムでは、修士論文執筆は必須です。首都圏の学生には放送大学の教員が、地方の

学生には居住地近くの大学の臨床心理士資格をもつ教員が、原則対面での指導を定期的におこなっています。ここからも学生は、臨床心理学的な発想や方法、そして何よりも心理臨床家としての姿勢を学んでいます。修士生の臨床心理士合格率は七〇〜八〇％程度（全国平均は六〇％強）です。この合格率の高さは、意欲に溢れた学生たちが充実したカリキュラムの中で学んでいる証左であると言えるでしょう。

公認心理師

1. 放送大学における公認心理師教育のスタート

放送大学では、二〇一九年度第一学期から、公認心理師対応カリキュラムを学部段階で開設いたしました。現在、公認心理師資格取得をめざす学生は、放送大学において開講されている「大学における（公認心理師となるために）必要な科目」を受講しています。

「大学における必要な科目」の中には、「心理演習」と「心理実習」

が含まれていますが、この「心理演習」「心理実習」は、二〇二二年度から開講されます。

2. 放送大学の特徴

放送大学は、「学びたい人すべてが、いつでも学べる『開かれた大学』」という理念のもとに設置された大学であり、学生数は全国で約九万人、三〇〜四〇代を中心に、幅広い年代の方たちが学んでいます。職業も、居住地域もさまざままで、授業の多くはテレビやラジオ、そしてオンラインを通じておこなわれます。

放送大学は、入試がなく、「生涯学習」の受け皿として広く門戸を開いているのですが、一方で、「公認心理師」という資格をめざす人のために、質を保った「専門教育」を提供するために、受講生を制限する必要があります。そのため、放送大学では、『心理演習』『心理実習』受講のための選考試験を実施しています。資格をとるための道は険しく、放送大学では大学院での公認心理師カリキュラムの対応はしていません。ことなどを丁寧に広報しています。

が、それでも受講希望者は多く、二〇二二年度開講のための選考試験では、定員三〇名に対して、三六三名の受験者があり、倍率は一二・一倍となりました。

3. 教養教育と専門教育

前述したように、放送大学では「広く門戸を開く教養教育」の中で、それとは相反する、「資格をめざす専門教育」を展開するという、難しい試みをおこなっています。

しかし考えてみると、これは「心理臨床」というものももっている特徴と合致しているような気もしています。「心理臨床」は極めて高度な専門性を有するものですし、だからこそ資格制度を必要とするのですが、一方で、

どんな人にも適用されるような、極めて普遍的な一般性を有するものとも言えるからです。

放送大学での公認心理師対応カリキュラムはまだ始まったばかり

ですが、質を保ち、結果として社会に貢献しようとする学生を輩出すべく、これからも努力していきたいと考えています。

さいごに

コロナ禍が続くなか、実践と対面を重視する心理臨床家の養成の方法は、大きな試練を受けています。テレビ会議システムやシミュレーション学習を取り入れた、実習や演習、指導の方法を模索せざるをえません。放送大学もこれまで積み上げてきた遠隔教育のノウハウを活かしつつ、五感をフルに使えるような新しい時代の心理臨床家養成の方法を模索中です。

放送大学の公認心理師対応カリキュラムのリーフレット

心

理

臨

床

家

の

養

成

帝京大学

建学の精神に基づく心理学教育

帝京大学は、ラグビーや駅伝で有名ですが、建学の精神に基づき、「自分流」という教育理念および「実学・国際性・開放性」という教育指針を有しているのが特徴です。

医学部や医療技術学部といった実学志向の学部に加え、臨床心理士や公認心理師といった心理専門職の養成も、大学の理念を具現化する営みと位置づけ、大いに力を入れています。

また、臨床のみならず基礎系の心理学が充実しているのが、本学心理学の特徴です。多様な心理学に対して開かれ、学術研究等を通して国際性にも通じた教育、養成を行うために、一学年定員二〇〇名の心理学科、そして一学年定員一五名の大学院臨

帝京大学文学部心理学科・大学院文学研究科臨床心理学専攻

元永拓郎
尹成秀

床心理学専攻（修士）、定員数名の心理学専攻（博士）を、総勢二四名の教員が担当します。本学での心理専門職としての学びは、まさに様々な心のあり様に開かれた「自分流」の歩みであると思います。

心理専門職をめざしての学部教育

心理学科では、一年次に臨床心理学概論など、まずは心理学の入門に関する学修から始まり、二年次には研究法や専門分野の講義が本格的に始まります。三、四年次には、ゼミに該当する研究演習がスタートし、各教員の得意とする分野で、研究を自ら行います。

一年次から公認心理師になるために必要な科目が履修可能ですが、三

年次から始まる「公認心理師プログラム」は、「公認心理師の職責」「心理演習ⅠⅡ」「心理実習ⅠⅡ」からなり、公認心理師を目指す人は必ず履修しなければなりません。このプログラム履修には、口述試験等の選考を通過する必要があります。

「心理演習ⅠⅡ」は三年次、「心理実習ⅠⅡ」は四年次に通年で開講されます。心理専門職となるための体験重視で実学志向の内容で、五分野すべての見学中心の実習に加え、附属の幼稚園や小学校で子ども達と生活を共にする体験実習もあるのが大きな特徴です。このプログラム履修時期には、実際にどんな心理職を目指すか、大学院進学のために何を学べばよいか、いったん就職してその

後大学院進学も考えたいなど、各々がライフプランを真剣に考えるようをみつめる時間を、私たちは大切にしています。

公認心理師等実習支援室の開設…三名の助教を配置

そのような心理専門職を目指す学生を強力にサポートするために、公認心理師等実習支援室を開設しました。心理の資格や仕事のこと、今さら聞きにくいことなど、いつでも気軽に相談できる窓口です。なかなか窓口に来られない学生へのきつかけ



実習支援室の常駐スタッフ（助教）

づくりとして、相談促進の週間である「公認心理師フェア」も開催しています。

学部生はもちろん大学院生も含め、六年間の一貫したきめ細やかなサポートによって、一人一人が興味・関心を深め、「自分流」の心理専門職を目指す志を支えています。助教三名の先生方は皆若手で、迷える学生たちに自然な形で寄り添います。実習で思い通りにいかなかったと涙目で戻ってきた学生も、実習支援室がしっかりとサポートします。

大学院臨床心理学専攻における多彩な臨床教育

大学院における心理専門職教育は、計一五名の臨床心理士等の有資格者教員が担当します。また附属の心理臨床センターには、三名の有資格者の教員が所属しており、一八名の教員から様々な臨床実践の学びを受けることができます。

大学院を修了し実際に現場に出る困らないように、臨床実践現場を常に意識し、求められる到達目標を丁寧に確認しながらの実践的学修が、

実学重視の本専攻の特徴です。

特に、実習にとっても力を入れていて、医療現場での実習に力を入れながら、教育や福祉といった分野の実習にも取り組みます。現場を知ることとはもちろん、実際にクライエントとかかわり、かかわって感じたことや考えたことを、しっかりと内省し、言葉にして、そうした心理学の学びと合わせて深めていくか、その他の心情理解のプロセスを、丁寧に共有していきます。すぐに専門家になつていくのが大学院生ですから、時にはその厳しさを前に躊躇する院生もいます。それも学びの中での大切な一面と考え、一緒に方向性を考えていきます。

心理臨床センターでの徹底した実践的体験

このような大学院の学びは、附属の心理臨床センターでの運営参加、

そしてケース担当などの実地体験の積み重ねによって、深まります。センターには、教員三名に加え、非常勤相談員、助手、実習補助員、修練生といった、多様なスタッフが務めています。受付方法や電話の取り方から、丁寧な指導を受け、実際に現場に出て困らないように体験を積み重ねます。

大学院生は、修士二年の冬から実際に心理面接(ケース)を担当し、学内スタッフからのスーパービジョンを受け、ケースカンファレンスにおいて事例理解を深めます。修士一年次には、現場に慣れずびくびくしていた院生が、担当ケースと正面からしっかりと向き合い、または向き合えない難しさに悩み、修士二年修了時には、謙虚さの中にたくましさ

を感じるようにぐっと成長することを、何度も見てきました。教員冥利に尽きます。

修了後のサポート、そしてネットワーク

大学院修了後も修練生としてケース担当を継続することができ、長い期間ケースをじっくりと担当できて鍛えられます。また修了生のためのレクチャーやケースカンファレンスも年一、二回開催し、交流を深めています。本専攻開設が二〇〇一年でしたので、キャリア二〇年近くの修了生もいて、相互に学び合い求人情報を共有する修了生ネットワークがあります。

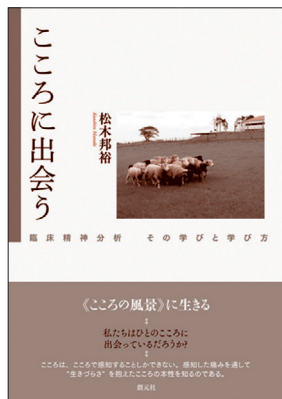
修了生は、大学附属病院、精神科病院、クリニック、スクールカウンセラー、教育相談センター、学生相談室、療育機関、児童相談所、児童養護施設、EAP、公務員など、様々な分野で活躍しています。何を学び、どう「自分流」のキャリア形成につながるか、そのことを皆さんにしっかりと問い、また一緒に考える場が、帝京大学にあります。



心理臨床センターのプレイルーム

「こころに会おう」——臨床精神分析 その学びと学び方

松木邦裕〔著〕 創元社、二〇一六年



こころのドア船橋 長沼佐代子

こころに出会い

インターネットやSNSの普及によって、ネガティブな感情の一方的な吐き出しは増えているものの、自分の思いを互いにじっくりと伝えるといったコミュニケーションは減っているように思われます。その理由の一つは、私たちが人の「こころに会おう」ことに感じる怖さにあるのではないのでしょうか。しかし、人のこころの健康には、自分のこころに出会うことと共に、自分を理解してくれる人、つまりもう一つのこころに出会うことが必要だと実感する今日この頃です。本書は松木邦裕先生

が、私たちがこころに出会うために、精神分析やその学び方、その臨床実践についての講演や著述を編纂した学術書です。

生きづらいには棘がある

私たちが臨床で出会う人たちのこころは傷ついており、「生きづらさ」を抱えています。本書のプロローグでは次のように書かれています。人は自分の「生きづらさ」を見ないようになっている、そして、そのこころに対して「傷つき過ぎて、見たくないのだから、そっとしてあげよう」とか、それが「守ってあげることだ」と考える人もいるが、それを漫然と続けるのは見過ごすことと同じだ、と。また、生きづらさには棘がある、その棘を手当てするには、他のこころに出会わなければならぬ、ただ、その棘は出会おうとして近づく者にも突き刺さる、しかしその痛みを通して、私たちは「生きづらさ」を抱えたこころの本性を知る、

と。

心理臨床に携わると、クライエントの傷ついたこころの棘がこちらに突き刺さるといふ体験は避けられません。それは共感によって相手の痛みを感じるといった生易しいものだけではありません。どんな慎重なアプローチを心掛けても相手のこころの棘に触れれば、怒りをぶつけられ、こちらにも痛みが走ることもありま。しかし、私たちがこころで痛みを感じることでは、こころの援助はできないということ著者は伝えています。

生きづらい現実を生き抜くために

著者によれば、心理臨床とは何らかの深刻な「生きづらさ」を抱えて生きている目の前のその人を理解し、その苦悩・苦難に圧倒されてしまわずに主体的に生きていくことを援助するために有用な、パーソナルな人間関与の実践です。人生が思い通りに進むことは少なく、理不尽なこ

とや様々な喪失による苦痛も避けられません。しかし、こうした現実を正確に認識し、それに基づいた適切な行動を検討するというこころの作業、つまり思考する（考える）ことで、こころは不安や苦痛に耐えられる強さを持てるようになります。面接で「話したって何も現実が変わらないのでは？」と聞かれることがあります。自分自身、自分のこころや人との関係の中で起きていることを正しく知り、考えることができれば、適切なこころの在り方や対応が見つかり、不安や苦痛は何とか生きられる程度には軽くなるのです。

本書は、心理臨床に関心のある皆さんが自分のこころ、そしてもう一つの他者のこころに出会い、こころを健康に保つのに役立つでしょう。そして、既に心理臨床に携わっている皆さんにはこころに出会う痛みに持ちこたえ続ける勇氣と希望を与えてくれると思います。



神戸松蔭女子学院大学 榊原久直

悩める、小さな主人公への道のり

一歳児さんの場合、知らない人や場所への不安でいっぱいであったはずであっても、机の上に置かれた検査用具の積み木が目に入ると、ぱつと表情が明るくなり、すぐさま目の前のアイテムに手を伸ばし、そのまま楽しそうに検査がスタートするということがあります。けれども二歳頃に近づくと、目の前のものに心を奪われそうになりながらも、「イヤ! ママといっしょがいい!!」と「自分」の主張を貫く力をその胸に宿すようになっていきます。またそんな我が道を行く二歳児さんですが、先

生が作った積み木のお山と自分のお山を見比べ、それをお手本にして同じものを作っては「できた! いっしょ!」と目を輝かせたり、より高い山を作っては「すごいでしょ!」と誇らしげな顔を見せたりもしてくれます。次第に積み木がタテ・ヨコの二つの方向へ発展するようになり、言葉を変えて「〇〇ちゃん

の”ものと”先生の”ものと区別をしたり、どちらの方が大きいかを比べたりと、二つの世界を同時に捉える姿を見せ始めます。そうしてたくさんのお山を作ることができるようになって誇りが、大きくなりたい自分と同時に、なれるかな……という不安な自分にも同時に触れられるようになり、二つの世界の間で揺らぐ姿を見せるようになっていきます。

このように、一人の子どもの「発達」には様々な機能や能力の成長が絡み合い、そしてそれらに伴って子どもの胸には新たな願いや悩みが宿

るようになります。そしてまたその願いや悩みを原動力として、子どもたちは周囲の仲間たちや大人たち、自然やモノと関わり合い、自分自身のこのころの世界をより豊かなものへと育てていきます。

発達検査はこころを映しているか

様々な困難さを抱える子どもの援助の中で、発達検査や知能検査を実施することが近年非常に増えています。けれども検査結果の報告書を見ると、発達指数や発達年齢といった数字や予測される障害とその困難さの説明ばかりが目立ち、「〃ができない・できない」という「行動」の話に留まる場合が少なくありません。

これは一見子どもへの理解が深まったように見えても、実際には「その子」のこころの理解を遠ざけてしまう危険な落とし穴です。

本書では子どもの発達のプロセスを、新版K式発達検査という発達検査に對する子どもの取り組み方や、

保育や教育場面での子どもたちの様子を紹介してくれており、発達検査がいつたい一人の子どものどのようなこころの機能の発達を測定しているのか、そしてそのこころの機能に発達が生じる時に、その子のこころの世界にはどのような変化が生じるのかを私たちに教えてくれます。それは失われがちな臨床心理学と発達心理学の繋がりを繋ぎ直す糸口であり、また、心理臨床の中で心理士が大切にしようとしている「子どもの願いや悩み」を発見することそのものではないでしょうか。

子どものこころの発達や回復にはどのようなメカニズムがあるのでしょうか。〃〃君の表情や日常が浮かんでくるような心理検査の報告書を書くにはどのようにしたらよいのでしょうか。そんな子どもの臨床現場の悩みをこの本で紐解いてみてください。

臨床心理士資格審査の受験資格を 取得することができる大学院

(2022年3月18日時点)

◆北海道

北海道大学大学院教育学院
札幌学院大学大学院臨床心理学研究科
札幌国際大学大学院心理学研究科
北翔大学大学院人間福祉学研究科
北海道教育大学大学院教育学研究科*

◆東北

岩手大学大学院総合科学研究科
岩手県立大学大学院社会福祉学研究科*
東北大学大学院教育学研究科
尚絅学院大学大学院総合人間科学研究科
東北福祉大学大学院総合福祉学研究科
秋田大学大学院教育学研究科

山形大学大学院地域教育文化研究科
福島大学大学院人間発達文化研究科
医療創生大学大学院人文学研究科
福島学院大学大学院心理学研究科

◆関東

茨城大学大学院教育学研究科
筑波大学大学院人間総合科学学術院人間総合科学研究群博士前期課程
常盤大学大学院人間科学研究科
作新学院大学大学院心理学研究科
東京福祉大学大学院心理学研究科
跡見学園女子大学大学院人文学研究科
埼玉学園大学大学院心理学研究科
埼玉工業大学大学院人間社会研究科
駿河台大学大学院心理学研究科
東京国際大学大学院臨床心理学研究科
人間総合科学大学大学院人間総合科学研究科
文京学院大学大学院人間学研究科
文教大学大学院人間科学研究科
立教大学大学院現代心理学研究科
早稲田大学大学院人間科学研究科
川村学園女子大学大学院人文学研究科
淑徳大学大学院総合福祉研究科
聖徳大学大学院臨床心理学研究科
放送大学大学院文化科学研究科*
帝京平成大学大学院臨床心理学研究科**
お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科

東京大学大学院教育学研究科
青山学院大学大学院教育人間科学研究科
桜美林大学大学院心理学研究科
大妻女子大学大学院人間文化研究科
学習院大学大学院人文学研究科
国際医療福祉大学大学院医療福祉学研究科
駒沢女子大学大学院人文学研究科
駒澤大学大学院人文学研究科
上智大学大学院総合人間科学研究科
昭和女子大学大学院生活機構研究科
白百合女子大学大学院文学研究科
聖心女子大学大学院文学研究科
創価大学大学院文学研究科
大正大学大学院人間学研究科
帝京大学大学院文学研究科
東京家政大学大学院人間生活学総合研究科
東京女子大学大学院人間科学研究科
東京成徳大学大学院心理学研究科
東洋英和女学院大学大学院人間科学研究科
日本大学大学院文学研究科
法政大学大学院人間社会研究科
武蔵野大学大学院人間社会研究科

明治学院大学大学院心理学研究科
明治大学大学院文学研究科
明星大学大学院人文学研究科
目白大学大学院心理学研究科
立正大学大学院心理学研究科
ルーテル学院大学大学院総合人間学研究科
東京学芸大学大学院教育学研究科*
東京都立大学大学院人文学研究科*
中央大学大学院文学研究科*
横浜国立大学大学院教育学研究科
神奈川大学大学院人間科学研究科
北里大学大学院医療系研究科
専修大学大学院文学研究科
東海大学大学院文学研究科
日本女子大学大学院人間社会研究科

◆中部

上越教育大学大学院学校教育研究科
新潟青陵大学大学院臨床心理学研究科
新潟大学大学院現代社会文化研究科*
金沢工業大学大学院心理科学研究科
仁愛大学大学院人間学研究科
山梨英和大学大学院人間文化研究科
信州大学大学院教育学研究科
岐阜大学大学院教育学研究科
東海学院大学大学院人間関係学研究科
静岡大学大学院人文社会科学研究科
常葉大学大学院健康科学研究科
愛知教育大学大学院教育学研究科
名古屋大学大学院教育発達科学研究科
名古屋市立大学大学院人間文化研究科
愛知学院大学大学院心身科学研究科
愛知淑徳大学大学院心理医療科学研究科
金城学院大学大学院人間生活学研究科
福山女学園大学大学院人間関係学研究科
中京大学大学院心理学研究科
同朋大学大学院人間福祉研究科
日本福祉大学大学院社会福祉学研究科
人間環境大学大学院人間環境学研究科
鈴鹿医療科学大学大学院医療科学研究科

◆近畿

京都大学大学院教育学研究科
京都光華女子大学大学院心理学研究科
京都先端科学大学大学院人間文化研究科
京都橘大学大学院健康科学研究科
京都ノートルダム女子大学大学院心理学研究科
京都文教大学大学院臨床心理学研究科
同志社大学大学院心理学研究科
花園大学大学院社会福祉学研究科
佛光大学大学院教育学研究科
龍谷大学大学院文学研究科
帝塚山学院大学大学院人間科学研究科**
大阪大学大学院人間科学研究科
大阪市立大学大学院生活科学研究科
大阪府立大学大学院人間社会システム科学研究科
追手門学院大学大学院心理学研究科
大阪経済大学大学院人間科学研究科
大阪樟蔭女子大学大学院人間科学研究科
関西福祉科学大学大学院社会福祉学研究科
近畿大学大学院総合文化研究科
梅花女子大学大学院現代人間学研究科
立命館大学大学院人間科学研究科
神戸大学大学院人間発達環境学研究科
兵庫教育大学大学院学校教育研究科
関西国際大学大学院人間行動学研究科
甲子園大学大学院心理学研究科
甲南女子大学大学院人文学総合研究科

神戸松蔭女子学院大学大学院文学研究科
神戸女学院大学大学院人間科学研究科
神戸親和女子大学大学院文学研究科
武庫川女子大学大学院文学研究科
奈良女子大学大学院人間文化総合科学研究科
帝塚山大学大学院心理科学研究科
天理大学大学院臨床人間学研究科
奈良大学大学院社会学研究科

◆中国

鳥取大学大学院医学系研究科
島根大学大学院教育学研究科
岡山大学大学院社会文化科学研究科
川崎医療福祉大学大学院医療福祉学研究科
崎美大学大学院教育学研究科
ノートルダム清心女子大学大学院人間生活学研究科

広島国際大学大学院心理科学研究科**

広島大学大学院人間社会科学研究科

比治山大学大学院現代文化研究科

広島修道大学大学院人文学研究科

安田女子大学大学院文学研究科

山口大学大学院教育学研究科

宇部フロンティア大学大学院人間科学研究科

東亜大学大学院総合学術研究科

◆四国

徳島大学大学院創成科学研究科
鳴門教育大学大学院学校教育研究科
徳島文理大学大学院人間生活学研究科
香川大学大学院医学系研究科
愛媛大学大学院教育学研究科

◆九州

九州大学大学院人間環境学府**
九州大学大学院人間環境学府
福岡県立大学大学院人間社会学研究科
九州産業大学大学院国際文化研究科
久留米大学大学院心理学研究科
西南学院大学大学院人間科学研究科
筑紫女学院大学大学院人間科学研究科
福岡女学院大学大学院人文学研究科
福岡大学大学院人文学研究科
西九州大学大学院生活支援科学研究科
大分大学大学院福祉健康科学研究科
別府大学大学院文学研究科
鹿児島大学大学院臨床心理学研究科**
鹿児島純心女子大学大学院人間科学研究科
鹿儿岛大学大学院心理臨床学研究科

◆沖縄

沖縄国際大学大学院地域文化研究科
琉球大学大学院人文社会科学研究科*

●臨床心理士になるには、財団法人日本臨床心理士資格認定協会が指定する上記大学院（以下、指定大学院）を修了し、「臨床心理士資格審査」の受験資格を取得しなければなりません。

●臨床心理士養成大学院は「第1種指定校」「第2種指定校」「専門職大学院」の3種があります。上記一覧で*つきは第2種指定校、**つきは専門職大学院、無印は第1種指定校です。

●第1種指定校の場合、大学院修了後に直近の試験を受験することができます。第2種指定校の場合、受験資格を得るためには実務経験1年が必要です。専門職大学院は第1種と同じ扱いですが、試験科目のうち小論文が免除されます。

◆大学・大学院(50音順).....

愛知学院大学心身科学部、同大学院心身科学研究科
 愛知教育大学教育学部、同大学院教育学研究科
 愛知淑徳大学心理学部、心理医療科学研究科
 愛知みずほ大学人間科学部
 青山学院大学教育人間科学部、同大学院教育人間科学研究科
 秋田大学教育文化学部、同大学院教育学研究科
 跡見学園女子大学心理学部、同大学院人文科学研究科
 茨城大学人文社会科学部、同大学院人文社会科学研究科
 茨城キリスト教大生生活科学部
 医療創生大学心理学部、同大学院人文科学研究科
 岩手県立大学社会福祉学部、同大学院社会福祉学研究科
 宇都フロンティア大学心理学部、同大学院人間科学研究科
 江戸川大学社会学部
 愛媛大学大学院教育学研究科
 追手門学院大学心理学部、同大学院心理学研究科
 桜美林大学健康福祉学群/リベラルアーツ学群、同大学院国際学術研究科
 大分大学福祉健康科学部、同大学院福祉健康科学研究科
 大阪人間科学部、同大学院人間科学研究科
 大阪教育大学教育学部、同大学院教育学研究科
 大阪経済大学人間科学部、同大学院人間科学研究科
 大阪樟蔭女子大学
 大阪市立大学
 大阪人間科学大学心理学部、同大学院人間科学研究科
 大阪府立大学現代システム科学域、同大学院人間社会システム科学研究科
 大妻女子大学人間関係学部、同大学院人間文化研究科
 沖縄国際大学総合文化学部、同大学院地域文化研究科
 お茶の水女子大生生活科学部、同大学院人間文化創成科学研究科
 香川大学医学部
 鹿児島純心女子大学人間教育学部、同大学院人間科学研究科
 金沢大学人間社会学域
 金沢工業大学情報フロンティア学部、同大学院心理科学研究科
 鎌倉女子大学児童学部、同大学院児童学研究科
 川村学園女子大学
 関西大学社会学部、同大学院心理学研究科
 関西福祉科学大学心理科学部/健康福祉学部、同大学院社会福祉学研究科
 関西学院大学文学部、同大学院文学研究科
 北里大学医療衛生学部、同大学院医療系研究科
 吉備国際大学心理学部、同大学院心理学研究科
 九州産業大学人間科学部、同大学院国際文化研究科
 九州保健福祉大学臨床心理学部
 九州ルーテル学院大学文学部
 京都大学大学院教育学研究科
 京都光華女子大学健康科学部、同大学院心理学研究科
 京都女子大学発達教育学部、同大学院発達教育学研究科
 京都先端科学大学文学部、同大学院人間文化研究科
 京都橘大学健康科学部、同大学院健康科学研究科
 京都ノートルダム女子大学現代人間学部、同大学院心理学研究科
 京都文教大学臨床心理学部、同大学院臨床心理学研究科
 杏林大学保健学部
 近畿大学総合社会学部、同大学院総合文化研究科
 金城学院大学人間科学部、同大学院人間生活学研究科
 久留米大学文学部、同大学院心理学研究科
 皇學館大学文学部
 甲子園大学心理学部、同大学院心理学研究科
 甲南大学(全学部で対応)

甲南女子大学人間科学部、同大学院人文科学総合研究科
 神戸大学国際人間科学部、同大学院人間発達環境学研究科
 神戸医療福祉大学人間社会学部
 神戸学院大学心理学部、同大学院心理学研究科
 神戸松蔭女子学院大学人間科学部、同大学院文学研究科
 神戸女学院大学人間科学部、同大学院人間科学研究科
 神戸親和女子大学発達教育学部・文学部、同大学院文学研究科
 駒沢女子大学人間総合学群、同大学院人文科学研究科
 埼玉学園大学人間学部、同大学院心理学研究科
 埼玉工業大学人間社会学部、同大学院人間社会研究科
 相模女子大学人間社会学部
 札幌学院大学心理学部、同大学院臨床心理学研究科
 志學館大学人間関係学部、同大学院臨床心理学研究科
 四国大生生活科学部
 静岡大学人文社会科学部、同大学院人文社会科学研究科
 静岡福祉大学社会福祉学部
 島根大学人間科学部、同大学院人間社会学研究科
 就実大学教育学部、同大学院教育学研究科
 十文字学園女子大学人間生活学部
 淑徳大学総合福祉学部、同大学院総合福祉研究科
 白梅学園女子大学子ども学部
 白百合女子大学人間総合学部、同大学院文学研究科
 仁愛大学人間学部、同大学院人間科学研究科
 福山学園大学人間関係学部、同大学院人間関係学研究科
 鈴鹿医療科学大学保健衛生学部、同大学院医療科学研究科
 駿河台大学心理学部、同大学院心理学研究科
 聖学院大学
 聖心女子大学現代教養学部、同大学院文学研究科
 聖泉大学人間学部
 清泉学院大学人間学部
 聖徳大学心理・福祉学部、同大学院臨床心理学研究科
 西南学院大学人間科学部、同大学院人間科学研究科
 専修大学人間科学部、同大学院文学研究科
 仙台白百合女子大学人間学部
 創価大学教育学部
 大正大学心理社会学部、同大学院人間学研究科
 筑紫女学園大学人間科学部、同大学院人間科学研究科
 中京大学心理学部、同大学院心理学研究科
 中部大学文学部
 筑波大学人間学群、同大学院人間総合科学学術院人間総合科学研究群
 帝京大学文学部、同大学院文学研究科
 帝京平成大学健康メディカル学部、同大学院臨床心理学研究科
 帝塚山大学心理学部、同大学院心理学研究科
 帝塚山学院大学人間科学部、同大学院人間科学研究科
 田園調布学園大学人間科学部、同大学院人間学研究科
 天理大学人間学部、同大学院臨床人間学研究科
 東亜大学人間科学部、同大学院総合学術研究科
 東海大学文化社会学部、同大学院文学研究科
 東海学院大学
 東京家政大学文学部、同大学院人間生活学総合研究科
 東京国際大学大学院臨床心理学研究科
 東京女子大学現代教養学部、同大学院人間科学研究科
 東京成徳大学応用心理学部、同大学院心理学研究科
 東京福祉大学心理学部、同大学院心理学研究科
 東京福祉専門学校ソーシャルワーク学部
 東京未来大学子ども心理学部/モチベーション行動科学部
 同志社大学心理学部、同大学院心理学研究科
 同朋大学社会福祉学部、同大学院人間福祉研究科
 東北学院大学教養学部
 東北大学教育学部・文学部、同大学院教育学研究科
 東北福祉大学総合福祉学部、同大学院総合福祉学研究科

東洋英和女学院大学人間科学部、同大学院人間科学研究科
 東洋学園大学人間科学部
 徳島大学人間生活学部、同大学院人間生活学研究科
 富山大学文学部、同大学院人文科学研究科
 長崎純心大学文学部、同大学院人間文化研究科
 長野大学社会福祉学部
 名古屋大学教育学部、同大学院教育発達科学研究科
 名古屋市立大学人文社会学部、同大学院人間文化研究科
 奈良大学社会学部、同大学院社会学研究科
 鳴門教育大学大学院学校教育研究科
 新潟青陵大学福祉心理学部、同大学院臨床心理学研究科
 新潟リハビリテーション大学医学部、同大学院リハビリテーション研究科
 西九州大学子ども学部、同大学院生活支援科学研究科
 日本大学文学部、同大学院文学研究科
 日本女子大学人間社会学部、同大学院人間社会研究科
 日本福祉大学教育・心理学部、同大学院社会福祉学研究科
 人間環境大学人間環境学部、同大学院人間環境学研究科
 梅花女子大学心理こども学部、同大学院現代人間科学研究科
 白鷗大学教育学部
 花園大学社会福祉学部、同大学院社会福祉学研究科
 兵庫教育大学大学院学校教育研究科
 広島大学教育学部、同大学院人間社会科学研究科
 広島国際大学健康科学部、同大学院心理科学研究科
 広島修道大学健康科学部、同大学院人文科学研究科
 広島文教大学人間科学部、同大学院人間科学研究科
 福岡大学文学部、同大学院人文科学研究科
 福岡県立大学人間社会学部、同大学院人間社会学研究科
 福島大学人間発達文化学類、同大学院人間発達文化研究科
 文京学院大学人間学部、同大学院人間科学研究科
 文京学院大学人間学部、同大学院人間学研究科
 別府大学文学部、同大学院文学研究科
 放送大学教養学部
 北翔大学教育文化学部、同大学院人間福祉学研究科
 北星学園大学社会福祉学部、同大学院社会福祉学研究科
 北海道大学教育学部、同大学院教育学研究科
 宮城学院女子大学学芸学部
 武庫川女子大学文学部、同大学院文学研究科
 武蔵野大学人間科学部、同大学院人間社会研究科
 明治大学文学部、同大学院文学研究科
 明治学院大学心理学部、同大学院心理学研究科
 明星大学心理学部、同大学院心理学研究科
 目白大学心理学部、同大学院心理学研究科
 安田女子大学心理学部、同大学院文学研究科
 山形大学地域教育文化学部、同大学院地域教育文化研究科
 山梨英和大学人間文化学部、同大学院人間文化研究科
 立教大学現代心理学部、同大学院現代心理学研究科
 立正大学心理学部、同大学院心理学研究科
 立命館大学総合心理学部、同大学院人間科学研究科
 琉球大学人文社会学部、同大学院人文社会科学研究科
 龍谷大学文学部、同大学院文学研究科
 ルーテル学院大学総合人間学部、同大学院総合人間学研究科
 早稲田大学人間科学部、同大学院人間科学研究科
 和洋女子大学文学部

◆公認心理師法第7条第2号に規定する認定施設
弘前愛成会病院

●本一覧は、一般社団法人日本公認心理師養成機関連盟に加盟している大学・大学院等(学部等名・研究科等名まで)、及び、認定施設です。ただし、改組等で学科名・研究科名が変更になっている場合もあります。詳細は、連盟のホームページに掲載されています。

追悼 鑑幹八郎先生

鑑幹八郎先生を偲んで

日本心理研修センター

村瀬嘉代子

鑑幹八郎先生が御逝去されたとお報
様から日本心理研修センターにお報
せ戴いた時は驚き絶句した。そのお
電話を戴いた三週間程前に、当セン
ターの評議委員会にご出席下さり、
エレベーター前でお見送りするセン
ター職員に「皆さん、ご苦労が多い
ことでしょう、健康に気をつけて」
と優しく微笑まれた時はお元気そう
でいらっしやいましたのに……。

先生は日本心理臨床学会会長を務
められたのを始め、様々な面で、我
が国の臨床心理学の発展のために大
きな御功績を残された。ただ、この
あたりのことについては他の方が語
られると思うので、私は先生が残さ

れた御功績や様々にお持ちでいらっ
しやった美德のうち、外国文化を受
け入れるに際して、それをただ先人
の優れた説や技法として受け入れる
のではなく、その理論が提唱される
に到った背景要因について周到に考
慮され、その理論や技法が生まれる
に到った歴史的背景、その理論が生
み出されたその地の文化の特質、さ
らには社会経済的状況なども考え
られて、我が国でその理論や技法を
取り入れ活かすにはどういう配慮が
要るかということを深くお考えにな
っていたところが私の尊敬するところ
であり、また共鳴するところでも
あった。

鑑先生が広島大学御在任中、大学
院の集中講義に招いて戴いたが一週
間のうち、昼間、多くの時間に教室
にお出ましになって、院生と一緒に
討論に御参加下さったが、自由闊達
さと問題追及への厳しさが絶妙にバ
ランスがとれていて、今も記憶に鮮
やかな充実した時間であった。そし
て、夕食を御一緒しながら、E・
H・エリクソンがアイデンティティ
という概念を提唱するに到った必然
性や背景要因、彼のような複雑な生
育背景を持たなかったり、基本的に
同質民族という感覚を持つ日本人が
複雑な或いは異なる文化、歴史的背
景、社会経済的要因、つまり自分た
ちと異なる背景要因の下に生まれた
理論や技術をいかに受け入れ、その
特質を効果的に臨床実践にどのよう
に活かすのかなど、本質的で真剣な
内容の会話を交わしながら時にユー

モアを交えて、真摯であるけれど重
くなりすぎない実り豊かな会話の時
を過ごさせて戴いたのも懐かしくか
つ貴重な思い出である。

公認心理師法が成立したのを機に
開かれた広島臨床心理士会総会にお
招き下さった折、鑑先生は法文に明
記されている公認心理師の職責につ
いて、これまでとはどこが違うのか、
その責任の重さを自覚する必要性に
ついて諄々と説かれた。外国の文化
をどう取り入れて自分なりに如何に
適切に活かすか、事に当たっては責
任を自覚する、先生から伝えられた
大切な課題、これらを事を処すに際
して、しっかりと活かしていきたい。
鑑先生のご冥福を心よりお祈り申し
あげます。

鑑幹八郎先生を偲ぶ——大樹と夢

広島大学名誉教授

岡本祐子

1. 鑑幹八郎先生の研究と臨床 わが国の臨床心理学を開拓する

鑑幹八郎先生が亡くなられて、今年五月で一年を迎えます。鑑先生は、精神分析的心理療法の理論と実践、夢分析、アイデンティティ研究、心理臨床家の育成・教育・倫理など、その奥行きと広がりを持った視点で、わが国の臨床心理学を牽引してこられました。日本心理臨床学会にもその設立当初から関わり、理事、常任理事、理事長として、貢献されてきました。

「境界」を超えて..

精神分析学とアイデンティティ研究

鑑先生のご専門は、対人関係学派 H・S・サリバンの流れを汲む精神分析学です。対人関係学派の精神分析学をわが国に初めて紹介し、その理論と臨床実践を発展させたのも鑑先生の功績です。



鑑幹八郎先生 日本心理臨床学会 学会賞受賞のお祝いの会にて (2002年11月9日)

鑑先生のもう一つの関心は、アイデンティティ論の創始者 E・H・エリクソンの仕事でした。先生は、エリクソンの理論や臨床に限らず、その人生そのものに深い関心をお持ちでした。エリクソンの人生とご自分の育ちの経験が重なるところもあると伺ったこともあります。

2. 心理臨床家を育てる

鑑先生は、広島大学教育学部（現広島大学大学院人間社会科学部研究科）に、一九七一年四月に着任され

ました。広島の地に初めて心理臨床の種をまき、大樹に育ててこられました。私たち学生は、精神分析学・力動臨床心理学の魅力に取り付かれて勉強しました。それは学問の魅力とともに、鑑先生ご自身のお人柄の魅力も極めて大きいと思われまます。鑑先生は、それまでの私の育ちの中で出会ったことのない魅力的な「異文化」であり、「謎」でもありました。「謎」とは何か。第一は、先生の仕事への向き合い方でした。それは、先生の Authenticity（本気であること）そのものでした。今から思うとそれは、学生に「本気で仕事をする姿を見せる」という教育ではなかったかと思えます。

第二は、先生の中の父性と母性、つまり厳しさと優しさでした。「相手を深く理解し抱える」「懸命に努力しながら待つ」——これらは、心理臨床家がクライアントに対して求められる姿勢ですが、先生の院生を育てるスタンスにも相通じるものでした。あの決して妥協しない厳しさと、包み込むような温かさは、どうやって形成されたものなのか。これ

は先生の土台であると直感しながらも、長い間、その由来は謎でした。

3. 謎解きとしての「境界を生きた 心理臨床家の足跡」

その謎解きの意味を込めて、鑑先生の生涯の物語を、山本力さんと私が鼎談の形で伺い、『境界を生きた心理臨床家の足跡』（岡本祐子編著 語り手 鑑幹八郎、聴き手 山本力・岡本祐子、二〇一六）として、ナカニシヤ出版から刊行しました。本書は、鑑先生の人生の物語であると同時に、わが国の臨床心理学の発展の歴史や、鑑先生ご自身の臨床経験がリアリティをもつて語られています。また若い世代に向けて心理臨床のヴィジョンと学び方が具体的に示唆されています。ぜひ読んでいただきたい一冊です。

この五〇年間、亡くなられる二か月前まで、言葉を交わし、信頼し学ぶという先生との関係を持ち続けることができたことは、私の人生にとってかけがえのない経験でした。先生のご冥福を心よりお祈り申し上げます。筆をおきたいと思えます。

鑪幹八郎先生を偲んで

京都文教大学臨床心理学部教授

松田真理子

鑪幹八郎先生は一九九八年に京都文教大学に教授として着任され、長きに亘り、学部生、大学院生の教育・指導に情熱を傾けて来られました。また、二〇〇八年〜二〇一四年には学長としても京都文教大学のために多大なる貢献をなさいました。

鑪先生が二〇二一年五月七日にすい臓がんで永眠されたことは、本当に悲しく残念なこととして大きな衝撃を受けました。毎年、大学院では事例検討会を実施しており、昨年はコロナ禍のためにオンラインで開催することになりました。事例検討会では現役大学院生、修了生で構成されている京都文教大学心理臨床学会の総会があり、鑪先生には顧問として長年、ご尽力いただいております。事例検討会の前に鑪先生にお電話で顧問を継続していただけるかお尋ねした際に、すい臓がんで闘病中であることをお話くださり、私は初

めて鑪先生の病状について知ることになった次第です。お電話では張りのある声で七月には鑪先生ご自身の講演会をご予定なさっていることもお話くださり、闘病は辛いけれども、まだまだ頑張るといってお気持ちを話して下さっていました。それだけに五月の急逝はとても衝撃的でした。

鑪先生の思い出を紐解くと、尽きることなくたくさんの方が溢れ出てきます。鑪先生は幅広い視野で夢分析やアイデンティティなどの奥深い研究を継続していらっしゃいました。特に先生のライフワークであった哲学者・森有正を軸に執筆された『森有正との対話の試み』（ナカニシヤ出版、二〇一九）はご自分自身との対話でもあったのではないかと思われまます。有正の祖父は明治の初代文部大臣・森有礼であり、岩倉具視の五女・寛子との間に父・明が生まれ、父は水戸徳川家の血筋である

母・徳川保子と結婚し、その間に生まれたのが森有正でした。まさに明治の動乱期を政治の表舞台で生きた一族の出自でした。二歳の時に牧師であった父によりキリスト教の洗礼を受け、キリスト教は有正に生涯を通して影響を与えることとなります。三一歳で結婚、三七歳で東京大学助教授。三九歳で戦後初のフランス政府給費留学生として渡仏しました。

一年で帰国する予定であったのに有正は東大の職位、収入を全て捨てパリに永住することを決意します。妻とは離婚し小学生の二女・聡子をパリに引き取りました。有正の無謀な決断に対し鑪先生は有正の『パピロンの流れのほとりにて』（講談社、一九五七）の「過去において不正直であったこと、外側だけでつじつまを合わせてきたこと、このことくらい自己の成長を害し、痛ましく心を噛むことはない」という有正の言葉から、日本で小器用にフランス哲学を学び東大助教授までなり得ているが学問の本質を蔑ろにしてきた有正の深い苦しみを見出しています。そして『城門のかたわらにて』（河出

書房新社、一九六三）では、自己経験によってのみ「真正 authentic な自分」が立ち現れることを有正が感じたことを鑪先生は指摘されています。有正が一四歳の時に父親を亡くしたように鑪先生も幼少時にお父様を亡くされたこと、有正がフランス留学で並々ならぬ苦勞を重ねたように鑪先生も精神分析の訓練のためにアメリカのホワイト研究所、そして統合失調症患者の治療を専門とするリッグスセンターに留学され苦勞されたことなど、重なる部分が多くありだったのではないかと思います。有正と同様、鑪先生にとつて authentic な経験、authentic な自己を見出すことは一生を賭けて追求するテーマであったと思います。

鑪先生、長い間、本当にどうもありがとうございました。これからもいつまでも私たちのことを見守り続けていてください。どうぞよろしく願います。

鑪幹八郎先生を偲んで

上智大学大学院／あざみ野心理オフィス

内田 亮

まず最初に断っておかなければいけないことがあります。私は鑪先生の直接の教え子ではないですし、先生の勉強会やセミナーに所属した経験もありません。私淑していたというのも微妙に実際とは異なっていて、あえて言えば「歴史上の偉人」のように思っていた気がします。そのうえで、あくまで一人の若手臨床心理士として鑪先生について書かかせていただきます。

直接の教え子ではない私が、鑪先生と最接近したのはこの広報誌「心理臨床の広場」(24号)のインタビューの時でした。どこの馬の骨とも知らない私を先生は歓迎してくれました。先生は私を不必要に緊張させないようとしてくださっていたように思います。その心遣いや歓迎のムードはオフィスや先生の佇まいのなかに自然と漂っているようでした。先生の話は、戦後の焼け野原のな

か戦争孤児たちを被験者に心理学実験を行った話から始まりました。話を聞きながら、私は先生がこの話を何度もしてきたのだらうと思えました。淀みない流れのなか、ところどころにくすぐりがあり、ドラマのよくな先生の体験談にあつという間に引き込まれてしまったからです。インタビュー後、お礼のご連絡をすると思いがけない長文の返信が届きました。インタビューを受けるなかで、卒業論文の実験中に考えていたことと、かなり経った後のエリクソンの翻訳にまつわる仕事に共通点があったことに思い至ったというのです。卒業論文で行った発達心理学的な研究が、のちのエリクソンの訳語の選択に影響を与えていたのではないかということ。「家に帰った後急に思い出しました」と書いておられました。浅慮な私が「はあ面白い話だなあ」と笑っている間、鑪先生は単

に今までできてきた話を繰り返しているわけではありませんでした。それどころか、自らを語るなかにおいて自身の無意識の働きにしつかりと取り組んでおられたのです。そしてその流れの点と点が線になったことをわざわざ教えてもくさいました。無意識の探求への真摯な姿勢に大変驚き感銘を受けました。

先生のご著書は一般向けに書かれたものも多く、たくさんの人々に心理学や精神分析に触れる機会を提供してきたと思います。冒頭で直接教えを受けたことはいないと書きました。が、私自身「臨床心理士という仕事があるらしい」と考え始めた高校時代、倫理の授業で習ったエリクソンの発達段階を通して心理学を知ることになりました。それを思えば、そもそも私を臨床心理学へ導いてくれたのも鑪先生だったのかもしれない。臨床心理学は面白く、一人が人生をかけて取り組む価値があるものであることを先生は教えてくれました。そして私たち後進を誘い、歓迎もしてくれました。こんなに歓迎してもらえたのだから、鑪先生から

受け取ったものを大切に守り、次の世代にも受け継いでいきたいと思えます。鑪先生ありがとうございました。ご冥福をお祈り申し上げます。

